

世界、星、宇宙を司る
最強の神の歩む道

夜と月と星を愛する者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神々の子であるシンが人の生を終えて神として歩む物語。そして、神王の座に就き、
全世界を守護する役目を負う。時にはダンジョンと呼ばれるものがある世界だつたり、
モンスターと呼ばれる龍がいる世界であつたり、箱庭と呼ばれる世界であつたり、深海
から来た艦の亡靈とも呼ばれる生物がいる世界、そして最重要世界、世界No.0の『ゼ
ラグニア』を守護している。友と共に

時間軸とスキルとかは気にしないでください。更に作者は難しい言葉が苦手です。

*これから話を持ち上げるために何話か話を変えました、ご了承ください

目 次

死と衝撃の事実									
けんぞくう									
ステータス									
今後ともよろしく									
囚われの姫君									
リリの非日常とシン達の日常									
戦争遊戯									
シンの世界と改宗									
白兎との遭遇									
豊饒の女主人での一悶着									
プレゼント(女)そして白の心の依り代									
ベルの稽古と歓迎会									
ファーストキスは幼女と、箱庭にGO									
箱庭でもリーダーになりました									
オラリオよ私は帰ってきたあ!									
娼婦の狐人とアイズ達とのお茶会									
104									
130									
123 113									
191 179 167 153 147 138									
96									

死と衝撃の事実

ある雨の日、多くの人に見守られながら1人の男が命の灯火が消えようとしていた
「なんで、なんで！何故俺を助けた！」

金髪の高校生の男が倒れてる男に叫ぶようにして非難した。数分前に2人が銀行の
前を歩いてる時に銀行強盗が運悪く出て来て、そこらの人より強い2人が取り押さえた
が、銀行強盗は2人いて、もう1人が金髪の男を銃で撃つたが、それにいち早く反応し
た黒髪の男が金髪の男を突き飛ばし自分が身代わりとなつたのだ、銀行強盗は到着した
警察によつて取り押さえられたが、打たれたところが心臓だったので、時間もないだろ
う

「…なんだよ、助けちゃ：悪かつたか？：」

「当たり前だ！お前にこんな事になるくらいだつたら俺が撃たれた方が良かつた！」
「…そんな事言うなよ、…お前の方が、こんな事になると…多くの人が：悲しむぞ…」
そんな事を言つてるとどんどん血は流れてくる

「何言つてんだ！お前にだつて悲しむ人が多くいるだろ！」

「…それは、…そいつらには悪いな…すまんが、眠くなつてきた…」

「馬鹿！寝るな!! 寝るんじやねえぞ!! おい！ 救急車はまだか!? 早くしろ！」

駄目だ、もう瞼も開けてらんねえな

「……おい、みんなに…伝えて……くれ」

「ツ！…もう駄目そうか？」

「…ああ」

「そうか、…何を伝えればいい」

「…『俺は…楽しかった、本当に…楽しかった』」

「…ああ…ああ！ 伝えてやる！ お前の遺言ちゃんとみんなに伝えてやるからな！ だから…だから！…安心して眠つてくれ…シン」 ポロポロ

「…ああ、じゃあな。十六夜」

そして、俺は死んだ

のはずなんだけどなあ

「馬鹿野郎！シンは俺が育てる！」

「…シンは儂が育てる」

「僕がシン君を育てます！」

上から全員真っ黒の美青年、髭もじやの槍を持ったお爺さん、どう見ても子どもにしか見えない水色の髪をした人

「あのー、すいません。貴方達は誰ですか？」

「あ、そういえば自己紹介してなかつたな。俺はカオスっていうんだ」

「…儂はオーディン」

「僕はアメノミナカヌシ。長いからアメでいいよ」

「…ん？…もしかして最高神？」

「あ、わかっちゃつた？ そうだよこにいる僕たちは最高神だよ」

「…マジ？」

「うん」

マジかよ。でも確かに俺は死んだから何が起こつても不思議じやあないな

「…それで、なんで俺は最高神である貴方達の前にいるんですか？」

「…あんま驚かないんだな」

力オスが聞いてきた、俺もあんまり驚いていない事に驚いているけど、この神達と会

うのが初めてって感じがしないからな

「何故かわかりませんが、貴方達と会うのが初めてじゃない感じがするんです」

「「・・・・・」」

「…どうしました？」

するとカオスが近づいてきてガシッと手を掴まれた

「良かつた！本当に良かつた！記憶に無くとも俺たちの事を覚えていてくれたか！」

「え？それはどういう？」

今度はアメノミナカヌシ改めアメが腰に抱きついてきた

「うえーん！良かつたよお！僕達の事を覚えていてくれたんだね！」

「…ああ、本当に良かつた」

オーディンが肩をポンポンと叩いてきた

「えっと、どういう事ですか？」

「それはね君は僕達がそれぞれ力を出して生み出した子なんだよ」

「え？じやあ俺は人じやなかつたんですか？」

「そうだね。君は神だね。でもある事が起きて君は下界に落ちちゃつたんだよ」

「…ある事とは？」

「それはねそこの馬鹿2人がどっちが君を育てるかで争つてその時に君にカオスの混沌

の力とオーディンの雷が君に当たつてしまいその衝撃で君が力を使えなくなつて、更にどつかの世界に落ちちゃつたんだ。探すのに苦労したよ。幾多もある世界をしらみ潰しに探したんだから」

「うぐ！」

「…はあ、そんな事が、だから俺は貴方達と初めて会つた気がしなかつたんですね。そして俺に家族がいなかつた訳ですか」

「うん、そうだよ」

「それで、俺はこの後どうするんですか？」

「そうだねまずはこの世界で力のコントロールと君に備わつてる神々の力を使えるようにしようか」

「神々の力？」

「そうだよ？ 僕達は最高神。数多の神々の生みの親だよ？ で、君には僕達が力加減を間違えたから色々な神の力があるんだよ。まずは僕から創造と破壊と維持を教えるよ。で、その後」

「…僕が武術の全てを教える」

「で、その後に俺が残りの全てを教えるという訳だ」

「という訳だ、かなり時間がかかると思うけど頑張つてね？」

「…こんな事が起きて、いきなり勉強とか…まあ、それに順応して俺も俺だが」

「あはは、でも君には僕達の後継者として頑張つて欲しいからね」

「後継者？俺が？最高神になるの？」

「うん」

「……はあ、わかつた頑張るよ」

「それは良かつた。それじやあ」

「「これから頑張れよ（つてね）」「」

やれやれ、まあいいやつてやるよ。もしかしたらあいつらとまた…いや死んだ奴が会
いに行くのは色々とまずいか、見守るだけにしようかな。その前にアメからの勉強を頑
張るか

けんぞくう

なんやかんやで大体10億くらい

「いやーシンは凄いなあ。あんなにあつた覚える事は全て覚えたし、今じゃオーデインの本気と同等の強さなんだから。僕びっくり」

「疲れた、まさか10億もかかるとは」

「あれ？ そんなに経つたんだ、僕達みたいに長生きすると時間の感覚がずれるからわからぬだよねーあはは」

「一体どれくらい生きてるんだか

「そういえばオーデインとカオスはどこいつたんだ？」

「ああ、2人なら」

「おう、今帰つたぞ」

「…手頃なのを見つけるのに苦労した」

「と、どうやら来たようだね。で、どうだつた？」

「おう、ばっちしだ！」

「一体何してたんだ？」

「それはな……ほら！」

カオスが蝙蝠2匹を見せた

「えつと、こいつらは？…おお」

蝙蝠が2匹とも飛んで俺に掴まってきた

「おいおい、俺達があんなに苦労して捕まえたのにすぐにお前に懐いたな」

「え？ カオス達が苦労するほど強いの？ この蝙蝠」

「んにや、強さじやなくてな」

「じゃあなんだ？」

「性格」

「は？」

「で、そろそろ本当の姿になつたらどうだ？」

すると、掴まっていた蝙蝠達が

「はーい、ヴァンパイアだよ。よろしくね主（わあ！ かつこいいイケメンだよ！ しかもヴァンパイアちゃんの好みだあ）」

「よろしくお願ひします」（主人様。 レティシアです（かつこいい：は！ 私つたら何考えてるの！？ ……でもかつこいいなあ）」

「は？ ……なあこの子達どうしたんだ？」

「ヴァンピィの方は誘つたら喜んで来たし、レティシアは売られてたから買った」
ええ、てか売られてたって

「本当に前達は俺の…なんだ？メイド？配下？家族？…まあ家族だな。家族になつていいのか？」

「うん（はい）」「…そ…う…か」

「うん、決まつたようだね。それじやあどうする？修行する事も少ないから、好きにしていいよ？」

そうなのか、なら

「それじやあ、色々な世界を見て回つていいか？」

「うん、わかつた。それじやあこれは僕からの餞別だよ」

アメが俺に赤いマントと銀色で青い石がはめられているの指輪を渡してきた

「これは？」

「マントの方は【祝福のマント】つていつて、装備者を自動的に回復させて全ステータスを超大幅に上げる効果もあってマント自体は腐食防止に自動再生があるよ。まあこれに傷をつけられる生物も限りなく少ないけどね。指輪は【天神の祈り】つていう指輪で効果は自然に関するものの操作が出来て、所有者の運を爆発的に上げて、ステータスを

「極大幅に上げるんだよ」

「そんな凄い物なのか」

「シンだつて創ろうと思えば創れるよ？」

「それもそうか」

「……僕からはこれだ、シンは刀が一番あつてあるようだからな。天魔刀【神羅万象】。効果は……なんだつたか？」

「忘れたのかよ

「神羅万象の効果は所有者のステータスを極大幅に上げて、不壊に自動再生と無敵貫通と必中、そして絶斬だよ。不壊は言わなくてもわかるね絶対に壊れないんだよ、でも切れ味は落ちたりするからそこで、自動再生さ。無敵貫通は文字通り相手が何かしらのスキルとかで無敵になろうが、何の問題もなく相手に攻撃できて、必中は相手がどれだけ早いだろうが、所有者の身体能力と視覚と第六感を上げて、靈的 existence でも攻撃できて、絶斬は相手がどれだけ硬くても豆腐を斬るみたいに簡単に斬れるんだよ」

「また、チート武器か」

「俺からはこれだぜ！」

「鍵？」

「おう！お前だけの世界を俺が創つといたんだ、それでこれはその世界の所有者を登録

するための物だ、それじやあこれに触ってくれ』

「ああ」

で、触ると俺が少し光つてその光が收まると鍵が消滅した

「え? 壊れた?」

「いや、お前を登録したからお前の中にある神力がその世界に入る為の鍵になつたんだよ」

「そうか:ありがとう。みんな」

「気にしなくていいよ」

「:楽しんでこい」

「長いようで短かつたな。偶には俺たちに顔を見せに来いよ」

「わかった、それじやあ行こうか?」

「はい!」

「それじやあな、落ち着いたら来るぜ」

「「「またな(ね)」」」

そして、俺はアメ達に背を向け転移魔法を使つた

ステータス

そして俺達は転移魔法を発動し適当な世界に行つた、そして着くと、どこかの路地にいた

「…どこの世界だ？」

「ここはダンまちの世界だ」

隣にいたカオスが返答した

「そうか」

「!? な、なんでいるカオス！」

「なんでいるって、そりやあ心配だから」

「俺一応かなり強いと自負してるんだが」

「まあ、心配つてのもあるが、お前がいるこの世界は神々が降りて来てるんだよ」

「は？ 神々が降りて来てる？ 下界に？」

「なんで降りて来てんだ？」

「確かに人間、彼奴らは子供と呼んでいるが、子供達と共に不自由な世界で暮らしてみたいんだと、暇だつたてのもあるが」

「そんな理由で大丈夫なのかよ。死んだ場合はどうなるんだ？」

「神界に送還される」

「なら間違つて殺しても大丈夫だな」

「ほどほどにな。さてと言うことでだシン」

「ん？」

「俺がお前達の主神になつてやる」

「……は？」

「え？」

「おいおい、神が神殺しの武器で殺された様な顔をするなよ」

「え？ マジ？」

「マジもマジ。大マジつてな」

「…やれんのか？」

「大丈夫だ、これでも原初の神だ、偶に色々な世界を覗いてたからやり方はわかる」

「そうか、それじゃあどうするんだ？ 俺は全くこの世界の知識がないぞ」

「まずは恩恵を背中に刻むんだ」

「……ヴァンピィとレティシアには触らせんぞ」2人をギュと抱き締める

「!!…（抱き締められてる！…あ、なんだろ落ち着く匂いだ、ずっとこのままでいたいな）」

無意識なのか2人が俺に抱きついてきた

「でもそうしないと恩恵刻め……あ、お前が刻めばいいんだ」

「…そういう俺も神だったな」

「…で、いつまで2人を抱き締めてるんだ？2人があかん顔をしてきたぞ」「は？」

2人を見ると顔がだんだんとろくなんとしてきた

「おーい、大丈夫か？」

「は！だ、大丈夫！」

「ならよし。それで恩恵はどこで刻む？」

「ちよいと待つてろ。【カオスルーム】」

カオスが目の前に不可視の穴を創りその先に部屋ができた

「ほんじや入ろうか」

「ああ」

そして入ると、何処にでもある部屋だった、イス、机、鏡、テーブル、ソファ、ベツ

ドにタンス

「さて、ほんじやあそこのイスに座つてくれ」

「そういえば恩恵つて本人のステータスを表すんだよな?」

「そうちが?」

「俺達、絶対あかんステータスになると思うんだが」

「・・・・・」

「「・・・・・」「」

「あ、いつけね考えてなかつた」

「おいしいいい!!?」

「まあ、なる様になれで」

「はあ、先が思いやられる…座つたぞ」

「それじや」

カオスは既に服を脱いでいるシンの後ろのイスに座つた

「!…(うわあ、凄い。細いから気付かなかつたけど凄い筋肉、無駄のない体だ、細マツチヨつていうのかな?)」

2人がそんな事を考へてゐる間にカオスは自分の指から血を流させベルの背中を触れた

「……よし、できた」

「終わったか、で、どんなだつた？」

「おう、ちよつと待つてろ。紙にお前のステータスを写し出せるから……ほれ」

「えーと」

シン（絶対神）

L v. 絶対神

力 : e r r o r

耐久 : EX 9 9 9 9

器用 : EX 9 9 9 9

俊敏 : EX 9 9 9 9

魔力 : e r r o r

絶対神 EX

世界の神 EX

星の神 EX

宇宙の神 EX

『魔法』

〔創造〕

- ・魔法とスキルの創造ができる
- ・形ないものから形あるものの創造
- ・生命創造

『スキル』

【頂点の理】

- ・全ての完全操作権限

- ・世界の創造

- ・星の創造

- ・宇宙の創造

【絶対神の威圧】

- ・対象に心肺停止、絶対服従、などの幅広い影響を与える

【武神の魂】

- ・全ての武術の極意

【最高神からの愛】

- ・超早熟する

- ・アメノミナカヌシの部下を召喚できる

- ・???

【主神からの愛】

・早熟する

・グングニル、グレイプニル、スレイプニルなどの武器や生物を召喚できる

・???

【原初の神からの愛】

・超早熟する

・カオスの部下 o r 子供を召喚できる

・???

???

???

「おい、色々と聞きたい事があるんだが?」「なんだ?」

「絶対神果ては世界、星、宇宙の神とはなんだ?」

「ん? 言つてなかつたか? 絶対神てのは神々の中でも頂点の座にいる者の位だ、そして世界、星、宇宙は文字通りだ

「世界、星、宇宙……どんだチートだな。俺に勝てるのがいるのか疑問に思つて來たぞ。

そして、位？聞いてねーぞそんな事

「そうか？なら言つとくと、アメは最高神でオーデインは超越神、俺は絶対神という位なんだ、神にも位があるんだ」

「なるほど、まあその事はいつか聞くとして、カオス達の愛ってなんだ？」

「俺たちからの愛だが？家族愛つて言うのか？」

「……」

「もう他に無さそうだな。それじゃ俺は先に出ておくぞ早く2人の恩恵を刻んでやるな。後」

「ん？」

「早く服を着ろ。2人が顔を真っ赤にしてるぞ」

「くくく！」 真っ赤

「…それもそうだな。…………よしそれじゃあヴァンペイから恩恵を刻むぞ」

「！う、うん」

するとヴァンペイが服を脱ごうとした

「までまで、背中を捲るだけでいい」

「え、あ、うん」 真っ赤つか

そして、ヴァンペイは背中を捲つた…………綺麗な肌だな

「さて、それじゃあ恩恵を刻むぞ」

俺もカオスがやつたように指から血をだして、ヴァンパイの背中に……
「……これでよし」

ヴァンパイ

Lv. 8

力 : S 1 0 0 0

耐久 : A 9 4 0

器用 : S S 1 4 0 0

俊敏 : S S 1 3 0 0

魔力 : S S S 2 0 0 0

吸血姫 A

眷属 EX

《魔法》

【プラッディ・リファイメント】

- 眷属の蝙蝠を呼び出して魔方陣を開闢し闇の剣で敵を突き刺す

- 敵が魅了状態ならダメージ UP

【スカラーレットギフト】

- ・ 対象の生力を奪い自身を含む味方を回復＆魔力を回復する

【チャームスロープ】

- ・ 対象に魅了状態を付与
- ・ 自身の力、耐久、俊敏を上げる

『スキル』

【テスマント】

- ・ 対象に闇属性の攻撃をする
- ・ 対象の魔法＆スキルでの強化を消す

【セルフイッシュ・ロイヤル】

- ・ 自身の力、器用を上げる

【絶対神の眷属】

- ・ 早熟する
- ・ シンとの念話が出来る
- ・ 一時的に自身を超強化することが出来る

【恋する女】

- ・ 早熟する
- ・ シンが近くにいると全ステータスを超大幅に上げる

ツツコまんぞ……絶対にツツコまんぞ

「ねえねえ主。ヴァンパイアさんどうだつた?」

「ああ、ちよつと待つてろ……紙に写してと、ほれ」

「…ヴァンパイアさん強い?」

「ああ、この世界の最強を超してゐるからな」

「よかつた、…ツ!〜!!」真つ赤

「ああ、一番下のスキルを見たのか

「…それじあ、今度はレティシアだ」

「!わ、わかりました」

「そんな堅くならなくていい。いつも通りのレティシアでいい」

「…わかつた、ありがとうご主人様……どうぞ」

レティシアが背中を見せる。うんやつぱり綺麗な肌だ

「さて、…………よし」

レティシア・ドラクレア

L V. 8

力：S S S 1 9 0 0

耐久：S 1 0 0 0
器用：A 8 8 0

俊敏：S S 1 4 0 0

魔力：S S 1 6 0 0

吸血姫 A

眷属 E X

『魔法』

【龍の遺影】

- ・自身の影を操る

【闇の翼】

- ・黒い翼を展開し空を飛ぶ事が出来る

『スキル』

【純潔の吸血姫】

- ・吸血をすることで一時的に全ステータスを上げる
- ・槍などの武具を召喚出来る

【鬼種】

- ・他者が鬼種を付与する事で全ステータスが上がる

・植物を操る事が出来る

【絶対神の眷属】

・早熟する

・シンとの念話が出来る

・一時的に自身を超強化出来る

【恋する女】

・早熟する

・シンが近くにいると全ステータスを超大幅に上げる

……まだよ

「……ツ！～～！」 真っ赤

ほら、レティシアも真っ赤になつてるし

「～～～！」

いつまでこの状態が続くのかね

一方カオスは

「すまんが、広い土地はないか？ フアミリアを新しく作るんでな」

「はい、それではここなんてどうでしよう？」

「ほう、中々に広いな。よしくらだ？」

「ここは・・・・億ヴァリスになります」

「ほれ、これでいいか？」ヴァリスの詰まつた魔袋を幾多も渡す

「それではご確認を致しますので、お待ちください」

「あいよ」

ファミリアの建設予定地の購入を行なつていた

今後ともよろしく

そして、俺たちは部屋を後にすると、部屋への入り口である不可視の穴が消えた
「さて、カオスはどこに行つた?」

俺たちが路地をキヨロキヨロとしていると、大通りからカオスが向かつてきました

「悪りい悪りい、遅れた」

「何をしてたんだ?」

「ファミリアの建設する場所の購入に行つてた」

「は?……金は?」

「あれくらい、俺のポケットマネーで買える。それじやあ行こうぜ、結構広いとこがあつたからそこを買つたぜ」

「お、おう。それじやあ行こうか?ヴァンピイ、レティシア」

「うん」

「よし、こつちだ」

そして、俺たちは大通りに入り注目（ヴァンピイとレティシアに向けられる男達の視線と俺に向けられる女達の視線）を浴びながらオラリオの東に向かつた、カオスは気配

を薄くしてから歩いていた、何処の幻のシックスマンだ

「ここだ」

カオスが止まるとそこには立派な門があり中は何もないものすごく広い庭があつた
「ここか、広いな」

だいたい東京ドーム5・6個分か？てか、よくこんな所が売られてたな。

「それじゃあ、どうする？業者に頼むか？創造魔法を使うか？」

「早く拠点も欲しいしな。それに暗くなつてきたから創造魔法を使うか」

「あいよ。あ、幻影と周りの人の記憶操作もやつとけよ？いきなりでかい家が出来たら
慌てるからな」

「そもそもうだな…【幻の夢】そして、【万物操作・記憶】これでよし。ほんじゃあ創る
から下がつといてくれ」

「うん」

さて、どんな風なのにするかねえ。……あ、そうだ、『虚言の城の王子』の城のよ
うな形でいいか、マジで人の想像力には助かるな

そして、おれが城の形をイメージし創造魔法を発動すると、まず城の形の半透明のものが浮かび上がり、下から順に実物と化していった

そして、大体10分後

「おお！いい城だな」

「まあな。本人の想像力には助かるよ」

「なるほど、人が想像した物をお前がイメージして創つたのか、だからこんなに早かつたんだな」

「ああ、と言つても内装は俺が創造したが、それでどうだい2人共？結構いい城だろ？」

「うん！」

「それは良かつた」

「ヴァンピィちゃん。質問がありまーす！」

「なんだ？」

「こんなでかい城だと迷うんじゃない？」

「…ああ、それもそうだな。それじゃあ中の造りの地図を渡すよ：創造魔法で創つてと、
ほい」

「ありがとう！」

「レティシアにも」

「ありがとうございます」

「それじゃあ中に入ろうぜ！」

「おう、行こうか」

中に入ると出迎えるのは中央にある噴水。そしてそれを囲むようにある龍の石像。東洋の龍の石像が2体、西洋の龍の石像も2体

「おお！ 良いな！ しかもその龍の石像ただの石像じやないな？」

「ああ、ストーンゴーレムドラゴンだ」

「おいおい、その時点でこの世界の生物全てが勝てない生物が登場したじやねえか」

「ま、侵入者又はここに悪意を持つて近づいた者だけを襲うようにしてるさ、それじやあ次に行こう」

俺たちは3つの入り口の内、正面の入り口に入った、そこは下がガラス張りで下には数多くの水の中を泳ぐ生き物達が泳いでおり、幾多もの扉と上に続く大きな階段があつた

「お次は水族館かよ。しかもまた凄い生物達のオンパレードだな」

「おう、念の為に下の生物達は侵入者又は悪意を持った者がここに入つた場合ガラスをすり抜けて攻撃するよう創つたから」

「凄い凄い！」

「わあ～」

2人もエントランスに感動しているようだ、下は綺麗な水の中を泳ぐ生き物達が興味津々と2人を見ていた

「おお！ここは倉庫か？武器に防具からポーションまで色々あるな」「おいおい、上に行くぞ」

「おう！」

「わかつた！」

2人が喜んでいるようで何よりだ

2階は…うん、あれだ警備兵（ゴーレム）の待機場所。今いるのは大体50体くらい、他は城内の警備してる。待機している間のゴーレムは眠り（起動停止）につく

「うわあ！堅ーい！ねえねえ主！この人たちは？」

「人じやないよ。ゴーレムだ」

「ゴーレムなの？凄い鎧と槍に剣、斧から弓まで」

「ああゴーレム達の装備だ、それじやあ次の階に行くぞ」

左右に並んだ兵士達の間を抜けながら上に続く階段を上る

「ここは…食堂か？」

「ああ、メイド達のな」

「メイド？ そんなのいたか？」

「今はメイド達は8階の俺たち用の食堂で調理から食事の準備をしてるよ」

「おいおい、何階まであるんだ？」

「10階だよ。10階にはカオスが座る用の玉座と玉座の間があるから」

「うへえ、そんな所に居たくないな」

「仮にもここカオスファミリアの主神なんだから頑張れ」

「まつたく」

「それじゃあ、時間も時間だから8階まで飛ぶぞ」

「おう」

「りようかーい」

「わかつた」

「よし、転移」

転移魔法で俺たちは8階の食堂に飛んだ、そこはメイド達が何人も待機して、テーブ

ルには豪勢な食事が並んでいた

「美味そうだな」

「ああ、これはいい。シェフを呼んでくれ」

「かしこまりました」

近くにいたエルフのメイドに頼むとメイドは綺麗なお辞儀をして厨房に入つていつた

「それじゃあ座るか」

「「おう（はい）」」

座ると生み出した、メイドがそれぞれ1人ずつ付き、グラスに黄金の蜂蜜酒を注いだ

「黄金の蜂蜜酒か…ヴァンピィとレティシアは酒飲めるか？」

「ヴァンピィちゃんは飲んだことあるから大丈夫だよ」

「私も酒は嗜む程度に」

「ならいいか」

「ゴク：あーやつぱ黄金の蜂蜜酒はうめえなあ」

「おいおい、乾杯もしてないのに」

「お、それもそうか、それじゃあこの世界ではよろしく！」

「「よろしく（お願ひします）」」

そして、俺たちは食事を楽しんだ

囚われの姫君

やあ読者の諸君、今俺はソーマファアミリアのザニス？ザコス？まあそんなモブのような奴に喧嘩を売られて戦争遊戯を仕掛けられたんだ、因みに喧嘩の理由は彼奴がヴァンピイとレティシアを置いてどつか行けと言つたから俺がまんま雑魚のセリフに笑つたのが原因だ、そしてなんやかんやで神会で詳しい説明が双方のファアミリアの主神がルールと何を賭けるかを言うそうだ

「この世界に来て早々厄介事かよ」

カオスは自分の部屋の椅子に座つてそう言つた

「すまんな、だがあんなクソ野郎に大事な2人を渡すのが嫌だつたからな」

「（だ、大事な！…ああ、やつぱり私、この人に恋してるんだ）」

やばい、2人が俺を見る目が熱くなつてきてる

「まあ、いいやそれで神会はいつあるんだ？」

「3日後だとよ」

「そうか、そして俺は何を奴らに求めればいい？」

「それなら、聞いてみたら奴らはかなり粗暴なファアミリアのようでな。しかも無理矢理

ソーマファミリアに入った子もいるようなんだ』

因みにこの事は帰る途中にあつた小人族のリリルカ、本人はリリと呼んでくれた言つたからリリから聞いた

「なるほど、それならファミリアの解体かその子達の脱退かどつちにする?」「今回は脱退の方で良いだろう」

「ん、わかつた、それじやあ俺は寝るわ」

「わかつた、それじやあ出ようか」

「わ、わかつた」

「は、はい」

うん、顔が赤い……どうしよう?まあこの事はいつかな

「それで、君たちはどうする?俺はソーマファミリアの事についてもう少し聞きたいことがあるからリリに聞きに行くけど」

「ヴァンピイちゃんは部屋で考えたい事があるから部屋にいるよ」

「わ、私も考えたい事があるので部屋に戻ります」

「そうか、それと俺は外で食事をとつて来るから」

「はい」

そして、2人が俺の屋敷の方に送ると、俺はファミリアを出てリリと約束した豊饒の

女主人へと向かつた

「いらっしゃいませ、お一人ですか？」

入るとウエイトレスの銀髪の子が話しかけてきた

「いや、待つている人がいるはずなんだが……ああ、いた」

カウンターで静かに座つていたリリを見つけた

「そうですか、ではメニューがお決まりになりましたらお呼びください」

「ああ」

そして、カウンターに近づくとリリが気づいた

「遅いですよシン様」

「やれやれ、様つて呼ばれるのは君で2人目だよ」

「そうなのですか？……それで、ソーマファミリアの事についてですよね？」

「そうなんだよなあ、そしてリリもソーマファミリアの子なんだろうね。微かにソーマの匂いがする。これは飲んでたらこんな匂いにはならないからな。それにリリの目は助けを求める目と絶望している目だ、しかも今まで多くの人を騙してきた目もしてゐる
「ああ、ソーマファミリアの団員である君に聞きたい」

「ツ?!…いつから気づいていました?」

「初めてあつた時」

「最初からですか……それで、リリがソーマファミリアの団員だからどうするんですか?
?そこまで知ってるんなら私が盗みをしてるのも知っているんでしょう?」

「ああ知ってる。ソーマファミリアの事も聞きたいが、それ以上に」

「?」

「君の本心を聞きたい」

「リリの本心:ですか?」

「ああ」

「:何を言つてるんですか?リリは」

「君の目が語つてる」

「リリの目ですか?」

「ああ、君の目は助けを求めてる目だ、そして絶望している目もある」

「…………」

「なあ、リリ」

「…………なんですか?」

「もう一度、助けを求めてみないか?」

「へ？」

「俺に、俺たちにもう一度だけ助けを求めてみないか？」

「……リリは……リリ……は……」ブルブル

「決めるのは君だ」

「リリは！ 助けられたいです！ 今まで多くの人を騙してきたりリリでも助けてもらえるなら！ 助けられたいです！」

「わかった、君の心からの叫び受け取つた、そして俺たちが君を助ける」

「ひぐ……うう……」

「待つていろ。近いうちに必ず助けに行く」

「ぐす……わかりました」

よかつたりリリが心を開いてくれて、にしても絶望していた子がこんなに早く心を開くのかね？ まあいいやる事は決まつた、ソーマファミリアの奴らを徹底的に叩き潰す

「あの、すいません」

「ん？」

考えているとさつきのウエイトレスが話しかけてきた

「あの、ご注文は」

「ああ、そうだつたな。リリ何食べる？」

「え？えーとそれならこれを」

「それじやあ俺はこれを」

「わかりました、ミアさん注文でーす」

「あの、リリは本当に助かつてもいいんでしょうか？」

「ああ、他者が反対しようが俺が助ける。だから待つていろ」
リリの頭を撫でながらそう言つた

「ん：わかりました、お待ちしていますよシン様」

「ああ」

さて、囚われの姫君を助けに行くとしますかね

リリの非日常とシン達の日常

「あのーシン様？」

「どうした？」

「本当にシン様のファミリアに泊まつていってよろしいんですか？」

「大丈夫だ、これでも団長だからな」

今はカオスファミリアに向かつてゐる……リリを連れて

「いえそれでも自分の事は自分で出来ますし」

理由はリリが隠れ家が見つかりかけてるからだそうだ、ソーマファミリアの奴らに「それでもだ、そういうえばリリはファミリアを抜けた後どうするんだ？うちに来るか？」
「え？…そうですね、シン様のファミリアに厄介になつてもいいでしようか？」

「ああわかつた、リリなら大歓迎だ：と、着いたよ」

「え？…あのーシン様？ここには何もありませんよ？」

「ん？…ああそうか、リリには説明していなかつたね。俺たちのファミリアはかなり特殊でね。ファミリアに入るには許可された者しか入れないようにしてるんだよ。今のように外から見ると、何も無いように見えるけど、門を潜ると」

そして、俺は門に手を当てるといつも通りに門が開き、一步踏み入れると

「え？…ええええええええええええええ！」

こんな風に景色が早変わり。城がある浮島に幾多もの浮島が多数存在している「ど、何処ですか!?」さつきリリはちゃんと門を潜つたのに！入つた瞬間別世界にいますよ！」

「ははは、
時期に慣れる。
ほら、こつちだ」

キユアアアアアア!!

「ん？…あ、やべ」

「へ？……あ、あれなんですか!? 鶯？獅子？どつちですか!? それに見た事もない銀色のドラゴンまで！」

氣づくと周りに警備していたゴーレム騎士からグリフオン、ドラゴンなどの幻獣がリ
リを警戒していた

「までまで、リリはお客さんだ、そしていずれこのファミリアよ団員になる子だ警戒するな」

キルア？（そうなのですか？）

あ
あ

キユルルア！（総員持ち場に戻れ！この子はお客様だ！）

グルア！（は！）

全員が警備に戻った

「い、今の魔物達はなんですか!?」

「すまんな。説明してなかつた、これも俺たちのファミリアが特殊な要因だ、さつきの鬱の顔をしたのがグリフオンと呼ばれる幻獣だ、魔物じやない。隣にいたドラゴンが銀星龍と呼ばれる宇宙を飛び回つてる龍だ」

「……あの、スケールがでかすぎて何から驚けばいいですか？」

「どうぞ驚いて、まだまだあるから」

「…リリの胃が持ちますかね？」

「…頑張れ」

「………はい」

そして、リリが色々な事（主に俺の眷属である2人）に驚きながら説明をしていき力オスにも説明した後、食事である

「あの…これ、酒…ですか？」

「ん？ああそういうえばリリはソーマの事で色々思う事があるんだつたね…まあ、その酒もソーマと同類だけど、騙されたと思って飲んでみな。気にいると思うから」

「は、はい」

そして、リリは黄金の蜂蜜酒を飲んだ

「あ、美味しい。酒なのに甘い」

「気に入ってくれてよかつたよ。それは黄金の蜂蜜酒といつてソーマと同じ分類の酒だけど、ソーマみたいに人をダメにしないさ」

「そうなんですか…コク：甘い♪」

いい笑顔だ

「それで、シン」

「ん？なんだ、カオス」

「明日はリリとダンジョンに潜るんだろ？…大丈夫か？」

……ああ、そうか、前に俺たちは軽くダンジョンに潜ったんだよ。あ、そういうえば言つてなかつたな冒険者登録は既にしてる。アドバイザーはミイシャつて言う人だった、何故かステータスは聞かれなかつた、…まあこちらは面倒事が無くて良いけど…話は戻るが、軽くと言つたが、多分周りからするもかなり奥深くに進んだ、確か70？80？とにかくかなり深く、途中魔物と戦つていつたけど、弱すぎたからもつと深くに潜つた、戦つた場所はアンデットが湧く古城だつた、…ダンジョンに古城つてどうなんだ？まあマグマの階層だつたりマイナス40度くらいの極寒の階層だつたり階層中が水で水中

戦を繰り広げなくてはいけない階層もあつたが、で古城はアンデットだからなのか痛みを感じずに向かってくるからヴァンパイアとレティシアがかなり楽しんで戦つてた、……正直ステータスの更新をしたくない。嫌な予感しかしたない

「大丈夫だ、リリでも大丈夫そうな階層で戦うから」

「それならいいや」

「うへへ～シンしやまあ～」

リリが抱きついてきた

「ツ！…むーー！」

ヴァンパイア達が頬を膨らませている。正直可愛い

「おいおい、酔つてるのか？」

「よつてませんよ～えへへ～」

「駄目だこりや。先にリリを寝かせてくる。食事を続けといてくれ」

転移つと…やつてきました俺の屋敷、空いている部屋のベッドに寝せて

「うーん…すう…すう…

よし、寝たな…転移と

「お、早かつたな」

「リリが早く寝てくれてな。かなり疲れてたんだろう。一人で頑張ってきたんだから」

「そうか」

「ねえ、主、あの小人族はファミリアに入るんだよね？」

「ああ、本人はその気らしい」

「大丈夫なのかな？このファミリアかなり凄いから」「結構驚いてたよ。まあ時期に慣れるだろ」

「それなら大丈夫だね」

「彼女にとつてはいきなり別世界に来たような気分だろうからね」

「ははは、レティシア。リリはそう言つてたぞ、入つた瞬間別世界だつてな」

「ふふ、そりなんだね」

そして、4人でリリの事とその他の話題で盛り上がり上がつて話した

戦争遊戯

リリと一緒にダンジョンに潜つたりカオスが神会に行つて打ち合わせをして来た、どんな風な会話かというと

「おう、ソーマ。てめえのガキが俺の子に手を出そうとしたんだってな？どう落とし前つけてもらうつもりだ？ああ？」

「い、いえそれは、その…」

「言い訳なんて聞いてねえんだよ。…覚悟しとけよ？」

完全にヤクザである。神会では黒いスースを着て行つたのでどつちかというとマフィアが近い

そして、戦争遊戯当日

「さあ！やつてまいりました！戦争遊戯！暇を持て余した神共！久しぶりの娯楽だぜえ！イエアア！」

「「「「おおおおおおおおおお！」」」

テンションが高い神とそれに大声を上げて雄叫びをあげる神達

「それでは今回の戦争遊戯は攻城戦だあ！そして、戦うのはソーマファミリアと……え？」

「おい、どうした？」「何かあつたのかい？」「幼女神（レティシア）ｐｒｐｒしたいお」「ぼ、僕に近づくな！」「あいつを取り押さえろ！俺らの幼女神（レティシア）ちゃんに指一本触れさせるな！」「おおー！」

おい待て、不審がる奴ら（神）の中にあかん奴がいたぞ

「え、あ、失礼しました。ソーマファミリア対カオスファミリアが今回の戦うファミリアです」

「「「「「…………え？」」「」」」

おっと、ヴァンピイ達の耳を塞いでないと

「え？ 主（ご主人）どうしたの（んだい）？」

「「「「「ええええええええ！」」「」」」

「どうして原初様がいらっしゃるんだ！」「あいええ！原初様！原初様なんで！？」「いついらしてたんだ!?」

混乱する神々と何がどうしたのかわかつていな人々

因みにソーマファミリアの方ではこんな会話がしてあつた

「へへ、何だ聞いた事ないファミリアじやねえか、てことは新規のファミリアだな。これは勝つたも同然だな」

「そうですね団長。 楽勝ですね」

「「「樂勝だな」」

何も知らない奴らにこの後、悲劇が待つてはいるとは予想もしてないだろう

「馬鹿ですねえ。シン様の強さを知らないからそんな事が言えるんですから、リリは後方なので大丈夫ですね」

この後に少しの間だけいたファミリアに改宗（コンバージョン）される小人族が不敵に笑っていた

「落ち着いてください！…それでは両者ファミリアの眷属達は準備が出来ているようですね…それでは」

さて、どうやら始まる様だな。確かに殺しは無しから手加減するか、ヴァンパイ達には手出し無用と言つてあるから久しぶりに暴れられるな

「戰爭遊戲！開始イイ！」

「「「うおおおおお!!」」」

スタートと同時にソーマファミリアの奴らが向かつてきましたな…さて、どうやつて始末するか……あ、これで行こう

「始まりと同時にソーマファミリアの眷属達がカオスファミリアの城に向かつて走つていきます！対するカオスファミリアは…は？1人？」

疑問に思うのも仕方ない。ヴァンピイ達は城の中でお茶とお菓子を食べてるし城の前に立つてているのが俺だけなんだからな

「ほんじや始めますか」

「おおつと？やつとカオスファミリアの団長であるシンが動きました！」

さて、まずは…

「暴れ狂う風の龍」

そして、俺は魔法を唱えると風の体を持つ龍が現れた

グルルアアアアアア!!!!

「ひ!?…か、カオスファミリアの団長。見た事もない魔法で龍を呼び出した!?

実況者がなに解説もしないでビビつてんだよ

「おい！聞いてねえぞ！龍を呼ぶなんて!?あいつはLv1じゃねえのかよ!？」

「は！カオスファミリアの団長のLVは…ない？」

「――――は？」――――

「か、カオスファミリアの団長のLVは記載されていません！」

実況者が手元の資料を読みながら言つた、それもそうだ俺はLVというものがない。さらに言うと恩恵なんかじや俺のLVは測れない。どうやらカオスがクロノスに言つて俺の事は秘密になつていてるようだ

「さらに彼が冒険者登録したのは5日前です！」

「うつそだろ!?」「たつたの5日での魔法をしてにいれたのか!?」

さてさて、あつちはあつちで阿鼻叫喚としているけどこつちもさつさと終わらせるか

「…やれ」

ガアアアアアアアア!!!!

風の龍が竜巻を発生させ宙に舞う人間たち

「「「うわああああああ!!」」

手加減したブレスをくらつて再起不能になる人間たち

「「「・・・・・」」チーン

とまあやりたい放題にやつてる龍にここは任せて俺は城に攻め込むとしますか、途中に城内にいた奴らが斬りかかつてきたが難なく気絶させた

「なんだよ！なんでこうなった？！あいつは一体なんなんだよ！くそ！！：ひつ！」
部屋に入ると地団駄を踏んで暴れてるザニスがいたが、俺が部屋に入ると怯えて後ずさつた

「てめえ！ 一体どんなイカサマをした!!」

「イカサマ？ そんな事する訳ねえだろ。お前らが弱いんだよ」

「ふざけんな！ 俺はLV2だぞ！？ お前みたいな駆け出しなんかに負ける訳ねえんだよ！」

「…はあ、弱い者ほど良く吠えるとはよく言つたものだな」

「俺が…弱いだと？」

「そうちどろ？ たつたのLV2だからって吠えやがつて…てめえの声を聞いてるとイラライラしてきた、おとなしく負けを認めろ」

「ふ、ふざけんなあ!!」

ザニスが手に持つていた剣で斬りかかつてきただが俺は
「ぐぼおあ!!」

ただあいつの腹にパンチを叩き込む

「……は！し、終了ー！カオスファミリアの勝利です！」

シーン

こんなに人がいるのに足跡1つしないほど静かだ、それもそうち龍を召喚してソーマファミリアの奴らを蹴散らして、ザニスを難なく再起不能にし俺が城内にいる間にヴァンピィ達のLVを知ったからな

「やれやれ、歓声を欲しがっていた訳ではないがこれは流石に酷いな」

パチパチ

パチパチ

どこからか2人分の拍手が聞こえてきた

1人は金髪金眼の白い服をきた女の子

もう1人は俺でも知ってるフレイヤファミリアの団長で俺たちが来る前まで最強

だったオツタル

「やれやれ、これは目をつけられたな」

こうして、戦争遊戯はあつけなく終わつた

その日の夜にあるファミリアで

「神様！ あの人、シンさん凄かつたですね！」

「そうだね。 あんな凄い子がいたんだね」

「僕、あの人ガカツコよかつたです！ 僕もあんな人にになりたいです！」

「待つんだベル君！ あの人は次元が違うから目標にしてはいけない！」

「かつこよかつたなあ」

「聞いてえ！」

シンの世界と改宗

戦争遊戯があつた次の日、ちゃんとリリを筆頭に今まで無理矢理ソーマファミリアにいた子達は無事脱退できた様だ、いやあよかつたよかつた

・・・いや、良くねえわ。

オラリオ中が俺の事とヴァンペイの話題で持ちきりだ、特に面倒臭いのが、フレイヤファミリアとその主神。フレイヤファミリアの団員達が誰かを探す様に路地や屋根の上で見かけるしふレイヤはバベルの塔の最上階から俺の事を探している様だ、え? なんで見つからないかだつて? オラリオで行動する時はいつも被つた者を他者に認識できなくするマントを羽織っているからな。まあ、それだけなら良かつたんだが、ロキファミリアの奴らも俺達の事を探している様だ、正直何故? と言いたいが、カオスから聞いたらロキファミリアのアイズつて子が兎にも角にも力が欲しいんだつてさ。それであの時の俺が呼び出した龍も然りlevelが不明然り。まあ俺が自重せずにやつたのが悪いんだけどさ仕方ないだろ? あんな酷い事してたんだから当然の報いだ、そして今

の俺の現状もかなりマズイ

俺が起きると美少女3人が俺のベッドに潜り込んでいた

美少女が潜り込んでいた（大事な事なので2度言つた）

どうしよ!?俺口リコンじやないぞ?!まあ可愛いと思うけどさ流石にね10億年も生きてる俺と高々2桁3桁の年齢の子に手を出すのはね?

いや、よく考えればヴァンパイ達は良く俺のベッドに潜り込んで来てたなそこに1人増えただけだ問題ない（問題大有り）

「「スウ……スウ……」」

……起こすのも悪いし少し散歩でもしてくるか

そして俺は着替えると屋敷を後にした

《城がある浮島の下に広がる広大な森》

「……に来るのは初めてだつたな…」

まず目に入るのは父母子の構成のユニコーン。そして俺の周りを飛び回る妖精。続々と現れては俺の足元に集まって来る小動物達、てかよく見たらこの世界つて俺が力オスから貰つた世界なんだよな。空を飛び回る龍、グリフォン、ペガサス、紫色のレティス……レティス!? ドラクエの神鳥が何故いるんだ? ……気にしたら負けだな。まあ取り敢えず

「俺は移動するからちょっとどいてくれるかな?」

俺の足元に集まつて来た小動物達をどかさないと

「「「「(。・ω・。)」「」」

「……わかつたからそんな顔で見ないでくれ……だつたら一緒に行くか?」

「「「「(。・ω・。)」「」」

どうやらそれでいいらしい。てか表情でしかわからないなあ。幻想郷に行つて覚り妖怪連れてこようかな? ……ダメだ幼女率が更に上がつてしまふ……あ、創ればいいじやん今は創らないけど

「そういえば、綺麗な景色が見れる場所はないかな?」

「「「「(。・ω・。) ?」「」」

「(。・ω・。)」

どうやら妖精達がいい場所を知つてゐるらしい

「そこまで案内してくれないか？」

「(*・ω・)ノ」

「ありがとう。それじゃあ一緒に行こうか？」

小動物達が首を縦に振つたのを確認すると、妖精達が先導して森の奥深くに入つて行く

大体歩くこと30分くらい、光る樹、杖、防具の材料、魔道具など使用用途様々な「靈樹」と呼ばれる樹が辺り一面に生い茂つており、オラリオにあるエリクサーとは全くの別物の不老不死にする事もできるエリクサーの材料の1つの【妖精の涙】と呼ばれる花、そして靈樹がある森の中心にある滝、奥に見える山は魔力が満ちておりその山から流れ来た水ももちろんの事かなりの魔力を秘めている。魔法使いからしたら涎ものの場所である。そしてそれがわかっているからこそ様々な生き物達も休息のためにここで休むらしい。今は白く美しい体の天龍が眠つておりそれとエルフ達が泉の水を汲んでいる

あ、1人のエルフが俺の事に気がついた様だ、慌てて俺のどこに全員向かつて来てD

O☆G E☆Z A☆をしてきた

「す、すいません！シン様の泉とは知らずに勝手に水を使つてしまい。申し訳ありませんでした！」

「んー？なんか勘違いしているな。確かにこの世界は俺のだけどその世界にある全てが俺のつて訳じやないしなあ

「ん？なんで俺の事を知つてるんだ？」

「え？…」

「え？」

「あの御存知ないのですか？シン様はこの世界に住まうもの全てがシン様の事を崇めるんですよ？」

「は？…カオスめこの世界を創った時に俺の事を全ての生物に認知させるだけじゃなく俺の事を崇める様にしたな。さつきからエルフももちろんの事、天龍もさつきから頭を下げてガクブルしてるし

「ああ、気にしないでくれ、別にここは俺の泉つて訳じやないからな。枯らすような事がないなら好きに使つてくれて構わない」

「あ、ありがとうございます！」

「「ありがとうございます！」」

「それより早く頭を上げてくれないか、流石に女の子達に頭を下げさせておくのは俺の良心に響くから」

「こんな美少女達の子たちに頭を地面につけさせておくのはねえ

「いえ、シン様のお姿を見る事などエルフである私たちの様なものでは…」
うーん、仕方ない

「ツ?」

俺はエルフ達の前に立ちエルフ達の顔を優しく掴んで上げさせた

「俺はエルフだと人間だからとか俺はそんなことは一切気にしない。君たちも俺と同じ生きる者だ、確かに俺はこの世界の所有者だけど、この世界に生きる者達を縛ることはしない。それに今俺の顔を見てどう思う?」

「え、えつと…か、かつこいい…です／＼」

「ほら、別に見ても問題ないだろ?だからそんな自分を卑下する様なことはしないでくれ、いいな?」

「わ、わかりました／＼／

顔が赤いけど気にしないでおこう

「それじゃあ、俺もそろそろ戻らなくちゃいけないからな。また会えるといいな」

「「「は、はい!」」」

エルフ達の笑顔を見た後、俺は転移した、屋敷に戻るとそこには

「「「・・・・」」ゴゴゴゴゴ!!

不機嫌そなヴァンピイとレティシアとリリがいた：何があつた？
「おい、一体どうした？」

「！主（ご主人、シン様）！」

「一体どうしたんだ？昨日まではそんなに仲は悪くなかっただろ？」
「ねえ、ご主人。さつきまで一体どこに行つてたんだい？」

「ん？さつきまではこの浮島の下に広がる森に行つてたが？」
「そう…そこで、女と会わなかつたかい？」

「…あれえ？なんで、わかるんだあ？」

「イヤ、アツテナイヨ？」

「嘘だね。だつてご主人の手から女の匂いがするから」

そう行つてレティシアは俺の手の匂いを嗅いだ

「うん、やつぱりする」

「…この子、いつこんなに嗅覚良くなつたの？吸血鬼だよね？犬じやないよね？」

「スウ…ハア…スウ…ハア…」

拳句に俺に抱きついて俺の匂いを嗅ぎ始めたよ。まさかのレティシアは匂いフェチだつた

「するい！ヴァンピィちゃんも主の匂い嗅ぐ！」
「リリもです！」

はつはつはつ、美少女3人が俺に抱きついて匂いを嗅ぐ、そっち系の人だつたら歓喜だが、生憎だが、俺はロリコンじやない

「こちら、朝食を食べに行くから離れて」

「「いや」「」

はあ、まあ、この子達の好きにさせるか

30分後にようやく三人共離れて、朝食を食べた後、リリのステータスの確認を行つた、ステータスは

リリルカ・アーデ

L v. 1

力:D 3 4 0

耐久:C 5 3 0

器用:D380

俊敏:C500

魔力:E180

《魔法》

【シンダー・エラー】

- ・変身魔法

詠唱式【響く十二時のお告げ】

《スキル》

【縁下力持】

- ・一定以上の装備過重時における補正

- ・能力補正は重量に比例する

【救われた女の子】

- ・早熟する

- ・救つた存在が近くにいる時に全ステータスを上げる

【恋する女】

- ・早熟する

- ・シンが近くにいると全ステータスを超大幅に上げる

まだよ（3度目）

「えっと、これは、その：／＼

リリは照れてるし。てか、なんでこんな早く俺に惚れるんだ？カオスに聞くか

「ん？あの子達がこんなにも早くお前に恋心を抱く理由か？」

「ああ、流石にこれは早すぎだろ？」

「俺はそうは思わんがな：まあ、あれだ、お前が女達からしたら凄く惹かれる要素をもつてるんだろ。顔もそうだしお前の力もそうだ、簡単に言うならお前はそういう星の元に俺たちが生まれさせた」

「お前達が原因かよ！？」

「仕方ないだろ？早く孫の顔が見たいんだ、だから早くベッドの上で運動会でもしろ」

「いきなり生々しくなったな！」

「大丈夫だ、子供の世話なら俺たちも手伝うから」

「そういう問題じゃねえだろ！？」

そんな会話が大体1時間くらい繰り広げられた

そして、今はギルドに向かっている。リリの改宗の事を報告しなければならないらし
い

「エイナ」

「はーい……あ、シンさんじやないですか」

この人はハーフエルフの職員のエイナだ、前はエイナさんと呼んでいたんだが、本人
からエイナと呼んでくれた言わされたのでそう呼んでいる。俺がマントを被つているの
で小声で話しかけてくれた、空気の読める女つて素晴らしいな
「リリの改宗の件なんだが」

「はい、ソーマファミリアからカオスファミリアへですね。少々お待ちください」
エイナが奥に入つて行きすぐに戻ってきた

「それでは：リリルカさんは？」

エイナがリリの姿が見えない事に疑問に思つたらしい
「それなら大丈夫だ、リリなら」

「プハア、リリならここに」

リリが俺のマントの中から顔だけ出してきた

「な!? シンさんなんでリリルカさんがシンさんのマントから出てくるんですか! ?」

かなり興奮しているようだが声は抑えてくれてる

「ああ、それはこの姿と気配を隠すマントが一つしかなくてな。かといってリリがいつも使つてた物だとリリつて事がバレて、俺の存在に気づく可能性があつたからな。だからこのマントの中に入つてもらつてたんだ」

まあ、俺と歩くペースが違うから俺がリリを抱っこした状態でここまできたんだがな。別にいやらしい事は何も無かつたぞ。リリが俺の匂いを嗅いだ事以外

「…はあ、わかつた、それじやありリルカさんこの紙に改宗の事と改宗先のファミリアを書いてください」

「はい」

「それで、シンさん。本当に何もも無かつたんですね?」

「なんで、ここまでエイナは聞いてくるのだろうか?」

「ああ、何も無かつたぞ」

「ほつ……なら大丈夫です」

「何が大丈夫だと言うのか

「書きました」

「はい、わかりました、それではリリルカさんこれから頑張つてください」「勿論です。リリは一生シン様についていきます」

「ツ…」

「それじゃあエイナ。またな」

「今度魔石を持つてくるときは自重してくださいね」

「……善処する」

「フフ…それではまた」

そして、俺たちはギルドを後にした

白兎との遭遇

リリの改宗の件をギルドに報告した後、俺たちは色々な事をした、ゴーレム達の材質を鉄からヒビイロカネに変えたり、メイド達と会話して不満などがないかを聞いたり、レティシア達と遊んだり稽古したりリリのスキルがかなり使えることを知つたのでシン作のハンマー【ガイアの怒り】を渡して稽古させたらLvが2になつたと思つたら3日ほどでLv3になつたので修行を自主鍛錬にさせたり、浮島の1つに黄金の林檎を筆頭に女神の果実などの様々な果実を植えたりなどをしていた

因みにこの事を知つた原初の神は

「いや、黄金の林檎はあかんだろ？誰を不老不死にする気だよ。いやまあ、黄金の林檎も女神の果実も美味いけどさ」

と言つていたが、シンは言つた、美味しいならいいじゃないかと、女神の果実は神力で育つのでカオスやシンなどの神がこの世界にいると自然に育つようにしてあるそうだ
とまあ、色々な事をしているうちに8日ほど経ち、今俺は1人でダンジョンに来てい
る。レティシアとヴァンピィはリリの稽古相手をしてもらつてるので一緒にとはい
い。何を思つたのか俺は5階層を魔物を倒しながらウロウロしていた

「はて？俺はなんで5階層にいるんだつけ？…まあいいか」

なんか、あれだなここにいれば面白い事が起きると俺の感がいつてる

◆？◆？◆？

ウロウロしている途中に白髪赤眼の兎を連想させる男の子が俺の横を通り過ぎていった……なんだろうさつきの子についていけば何か面白い事が起きる予感がする。思い立つたが吉日とも言うしつしていくか

「確かこの先に進んでいったはずだが…」

「うわあああ！」

突然、前方からミノタウロスに追われてるさつきの白髪の男の子が向かって來た、面倒臭いから白髪でいいや

「おいおい、なんでこの階層にミノタウロスがいるんだ？」

「あ、そこの人逃げてください！ミノタウロスが！うわっ！」

こつちに向かつてくる途中に躊躇して転んだ

「ブモオオオ！」

「うわああ!?」

ミノタウロスが白髪に向けて武器を振るう前に俺が
シユ!

風を斬る音と同時にミノタウロスの動きが止まつた
「……え?」

白髪が間抜けな声を上げた、それもそうだろう風を斬る音がしたと思つたらミノタウ
ロスの動きが止まつたのだから、そして

ズリ:

ミノタウロスが腰の辺りから半分になつて上半身が地面に落ちたのだ、それと同時に
白兎に血を浴びせながら

「…大丈夫か? 白髪」

俺は天魔刀【神羅万象】を鞘に收めると白髪に手を差し出した

「……う

「う?」

「うわああああ!!」

いきなり大声を上げたと思つたら白髪は脱兎の如く去つていった、見た目も相まつて
なんか合う。兎だけに

「…はて？なんか怖がらせるような事はしたかな？」

不思議だ…あ、そういえばこのマントをしてたな。白髪から見たら鼻と口だけした見えない男から手を差し伸べられたんだから逃げても…おかしくないのか？それに俺のせいで血を被つてしまつたし

「さて、どうしたもんか…ん？こつちに誰か向かつて来てるな。厄介ごとが起きる前にここから去るか」

こちらに猛スピードで向かつてくる気配を感じたので俺はその場を後にする。今日の晩御飯はどうしようかなと考えながら

『アイズサイド』

私はとにかく急いでいた、私たちが取り逃がしたミノタウロスがこの5階層にまで上がってきたから

「ねえ、アイズ」

隣を同じく走っていたアマゾネスのティオナが話しかけてきた
「どうしたの？」

「いや、それがさおかしくない？魔物と一匹も会わないことにさ

そう言わせてみればそうだ、この階層だけ魔物と一匹も会っていない。下の階層では必ず出くわしていたのに

「…なんでだろ？」

「わかんない：ねえ、アイズ。この先から血の匂いがするよ」

アマゾネスだからなのか、LV5だからなのかわからないけどティオナは血の匂いを感じ取つたらしい

「まさか、誰かがミノタウロスに…？」

「この角を曲がつた先だよ……これは？」

ティオナが止まつたと思つたら何かありえないものを見たような顔をしている。私もそこを見てみると、そこには

「…・・・」

半分に斬られた物言わぬ亡骸となつたミノタウロスがいた

「これは…どういうこと？」

ありえない。この階層は駆け出しの冒険者がよくいる階層だからミノタウロスを倒せるほどの実力を持つ冒険者がいるわけがないのだ、そして私はそれ以上に気になることがあつた

「この太刀筋：」

ミノタウロスが斬られた箇所は凄く綺麗に斬られていた、私でも不可能なほど綺麗な跡だった、…会つてみたい。これほどの綺麗に斬る人に会つて、話をしてみたい。これほど綺麗に斬る人に教えてもらいたい、貴方のこれほどまでの強さを

「…ズ…アイズ？」

「！…どうしたの？」

「いや、それはこつちのセリフだよ？どうしたのさミノタウロスの死体を眺めてボーッとしてさ」

「…この太刀筋が、凄くて」

「これ？アイズが褒めるなんて珍しいね」

「私でもこんな太刀筋は無理」

「ツ！…本当に？」

「うん」

ティオナが驚くのも無理はない。だってアイズは『剣姫』と呼ばれる第1級の冒險者なんだから、そのアイズが無理と断言するほどこのミノタウロスを倒した人は凄い人なんだから

「……じゃあ誰が？オツタル？」

「…わからない」

それだけがアイズをがつかりさせた、もう少し早く来てればその人と会えたかもしないのにと考えずにはいられなかつた

「とにかく、一旦団長達の所に戻ろう?」

「…そうだね」

いつか必ず会つてみたい。そう心に決めたアイズに近いうちに会うとは夢にも思つてないだろう。それは神の悪戯か、それともシンがつけてる運を上げる【天神の祈り】のせいか、それは誰もわからない

豊饒の女主人の一悶着

白兎から逃げられて、少し凹みながらギルドに行くと
 「だからエイナさん！ フードを被つた刀を使つてミノタウロスを一撃で倒す男の人ですって！」

「だからねベルくん、私はフードを被つてミノタウロスを刀で一撃で倒す男の人は知らないのよ」

「でも僕はちゃんと助けてもらつたんです」

「うーん、わかつた、私の方でも探してみるよ」

「わあ！ ありがとうございます。エイナさん！」

「ところでベルくん」

「はい？」

「いつまで身体中に血を浴びた状態でいるのかな？」

「…あ」

エイナと話してさつき逃げた白兎（血塗れ）がいた、やてどうしようか、話しかけたらまた逃げられた、なんて事は起きて欲しくないしなあ。ま、エイナもいるから大丈

夫だろ

そして、俺は白兎の背後に立ち、白兎君の肩に手を置いて

「やあ、また会ったな白兎」

「うわ!…………うわああああああ!!!?」

案の定悲鳴は上げたけど逃げはしなかつた

「そんな大声をだすな。他の冒険者もいるんだから」

「あ、す、すいません」

「あれ？シンさんどうしたんですか？また誰も行つたことのない階層まで行つて魔石を大量に持つてきて私たちギルド職員達を困らせに来たんですか？」

「いや、今日は気分転換がてらに5階層をブラブラしてただけだ、魔石もそんなにないしな」

「そ、うなんだ、珍しいね。……5階層？：もしかしてシンさんがベル君をミノタウロスから助けたの？」

「ああ、助けたら逃げられたがな」

「もう、ベル君、ちゃんとシンさんにお礼を言いなさい！」

「は、はい！……あの、先ほどはミノタウロスから助けていただきありがとうございました！」

そして、貴方から逃げてすみませんでした！」

「気にするな」

「でも…」

「…それならいい店を紹介してくれないか？外で食事をした事があまりなくてな」

「あ、それならいい店を知つてます！」

「それなら好都合だ、暗くなつてきたし案内してくれないか？」

「はい！」

白兎の満面の笑み

「それじやあなエイナ。仕事頑張れよ」

「ええ、……私もシンさんと食事したかつたな」

本人は小さく言つたつもりだろうが、俺には一言一句聞こえてる

「そうだ、エイナ。仕事がない日でいいんだが、エイナの都合がよければその時に見つけた店で食事しないか？」

「ツ！…聞こえてたんだ、恥ずかしい……ええ、その時は教えるわね」ニコツ

いい笑顔だ、そして俺たちはギルドを出ると、ベルに店に案内してもらう

「それじや案内してくれ」

「わかりました！…そういえば貴方の名前つてシンさんつて言うんですか？この前の戦争遊戲の…」

「ああ、よくわかつたな。今から行く店で代金を払つてやろう」

「え？ い、いいですよ。シンさんに奢つてもらうなんて」

「大丈夫だ、金はたんまりあるしな。お前が大食感でも余裕で払える」

まあ、某ピンクの幽霊少女並みの胃袋をしてなければの話だがな

「それじやあ僕が世話になりっぱなしじゃないですか…」

「ありやりや、目に見えて落ち込んでる。……そうだ

「それなら、俺の話し相手になつてくれないか？」

「え？ 話し相手ですか？」

「ああ、まだ男の友人が少なくてな話し相手がいなんだ、でたまにでいいんだが俺の話し相手になつてくれないか？」

「まつたく恩が返せない案だと思いますけど…こんな僕でよければ」

「それはよかつた」

「あ、ここです」

どうやら話し込んでる内についていたようだ

「豊饒の女主人か…」

「それじやあ入りましよう」

店に入ると接待をしていた銀髪の子がこちらに向ってきた

「ベルさん、来ててくれたんですね」

「はい」

「後ろの方は?」

「この人はシル……」

白兎が口を滑らせようとしたんで口を塞ぐ

「白兎のまあと友人つてとこだ」

「フハア!何するんですか」

俺は白兎がまた口を滑らさないように耳打ちをする

「いいか、白兎、俺はこん前の戦争遊戯でかなり目立つちまつた、ここで俺がその人物です。つていつたらどうなると思う?」

「は!……そうでした、すいませんシンさん」

「あのー?どうしたんですか?」

「いや、大丈夫だ、それより後ろの人があなたを見つめるけど大丈夫なのか?」

「え?……」

銀髪の子が後ろを見るとそこには厨房からジツと銀髪の子を見つめる強そうな女性がいた

「ミ、ミアお母さん!」

「シル、さつさと客を席に座らせて注文とりな！」

「は、はい！」

おうおう、これまた凄い人が出て来たな。今は知らんが全盛期はそれなりに強かつただろうな

「えっと、こちらです」

銀髪の子改めシル君が席に案内する。そこは厨房からでも面と向かって話ができるカウンターだった

「もつと話がしたかったんですけど…」

そう言つてシル君は接待に戻つていった、……あれ？ 注文取らなくていいの？ そう考えていると

ドン！

目の前にかなりのボリュームがある肉が2つ置かれた

「あんたがベルだね？ シルから話は聞いてるよ。なんでもあたいらを驚かせるほどの大食感なんだつてね？」

注文からミアが話しかけてきた、なんかこんな威厳があるとついつい呼び捨てにして

しまう。あれか？ 僕も父親でもおかしくない年だからか？ *シンは10億歳

「ええ！ 僕そんなに食べれないですよ？」

白兎が接待をしているシル君に目を向けると

「……テヘ」

あざと可愛い顔をしてきた

「シルキーーん!!」

俺にできることは

ポン

「シンさん?」

「頑張れ」

「……」ガクツ

白兎は崩れ落ちた

「さて、それじゃあ俺も食いますかねえ」

「いいですよ。頑張りますよ! もつと料理持つてきてくださいーい」

「おお、いい気概だ」

そして、俺たちは次々に出される料理を舌鼓を打ちながら食事を続けていった

キングクリムゾン!!

「ゞ予約のお客様ゞ来店にやあー！」

猫人の茶髪の子が大声を上げると店に団体が入つてきた、その中には戦争遊戯の時、俺に拍手してきた金髪の子がいた、でも何故だろうあの子に関わるとろくな事がない気がする。無視するに限るな。幸い俺はいつも通りマントを被つているからあいつらからは認識されないだろう。そういうえば説明してなかつたなマントはこんな感じだ

無隠のマント

・羽織ると気配を完全に消し、姿を見れないようにする。羽織つた者が許可した者だけ気配も姿も見れる。ただし体に何かを被つたりしたら効果が薄れる
「さーて、ダンジョン遠征からの帰還も祝つて祝いやー！飲め飲めー！」

赤い髪の女、多分ロキファミリアの主神女神ロキだろう。なんで女なんだ？と思つたがそういうえばロキはメス馬になつて子を産んでオーデインにスレイプニルを渡したんだつたな。それなら女になつてもおかしくないのか？

「あの人たちは誰なんでしょう？」

白兎はどうやらあいつらの事を知らないようだ

「あいつらはこのオラリオでもトップのロキファミリアだ、目をつけられたくなかつたらあいつらとはあまり関わらん方がいいぞ」

「え？…つまり、あの人たちはかなり強いんですか？」

「だな、LV5が4人、LV6が3人、そしてLV3が1人つて構成だな。ここに来てるのは」

「そんなに高いんですか！？：なんで目をつけられるとまずいんですか？」

「あそここの赤い髪の女が見えるだろ？あいつはロキファミリアの主神のロキで、気に入った子をファミリアに入れようとするんだ、付け回されるぞ」

「うわあ、でも見たところ女性に対してもんじゃないですか？今も金髪の綺麗な人に触ろうとして返り討ちにあいましたけど」

「確かにそうだ、ロキは女癖が悪い、だけど、絶対に女だけが対象じゃない。気に入っ子なら男でも入れるだろうよ。特に白兎は危険だろうな」

「え？なんですか？」

「お前は男だが、男らしくない顔つきだ、更にお前の白髪と赤い目が更にそれを際立たせる。体つきもどつちかと言うと女に近いしな」

「うぐ！僕が気にしてるところを」

「なら、もつと鍛えればいいだろ？俺でよかつたら鍛えてやるぞ？」

「ほんとですか！？お願ひします！」

「ああ、わかつた。場所は…」

どうしようか？俺たちのファミリアでもいいが白兎が龍やグリフロンを見て卒倒する未来しか見えない

「どうしました？」

「なあ、白兎。特訓するところで最適なところはないか？できるなら人目があまりないとこがいいんだが」

「人目がないどこですか……あ、城壁なんてどうです？あそこは人目どころか下からじや見えませんし人が来るとは思えませんから」

「なるほど、城壁があ、確かに昼はいるかもしけんが朝や夜はいないだろうな
「わかつた、そこで特訓をするとしよう。白兎の武器はなんだ？」

「僕の武器はナイフです」

「ナイフかあ……なら、敏捷と技術を上げるのを第一目標にするとしようか」

「わかりました」

「さて、飯も食つたし支払いをしてからでるか」

「あ、えっとお世話になります」

「気にするなつて言つただろう？シル君支払いを頼む」

「あ、もう帰るんですね」

「はい、神様が心配してるとと思うので」

「そうですか、……と、ヒーフーミー……お値段は————ヴァリスです」

聞かれた値段の通り俺は胸ポケットに手を入れそこから出したように見せ収納空間からヴァリスが詰まつた小袋を渡した

「はい……値段ピッタリですね。またのご来店をお待ちしております」

「よし帰るぞ」

「はい」

そして俺達が出口に向かおうとしていると

ドン バシャア

体の左側が何かにあたり、左肩から酒を浴びてしまった

「んあ？ どけ、邪魔だ」

しかも当たつたことに関して謝りもしないか、この狼人はいや謝りもできないなら駄犬がちようどいいか

「あ、あの大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ、直ぐに乾く、それじゃ行こうか」

俺が歩み始めるが、白兎も俺に追いついて来た、しかし

「おい、てめえ、無視してんじやねえぞ！」

また、駄犬か、なんでここまで突つかかつて来るんだ？ 顔が赤い、酔つてるのか

「酔っ払いとは話したくないからな」

俺が一瞥してそう言うと駄犬は

「んだと!?

「こんな挑発でもない言葉にキレるとは相当短気なようだな
「やめー、ベート、ここは酒の席やで喧嘩する場所やないで」

「黙つてろ!これは俺とこいつの問題だ!」

そつちが突つかかつて来たのに俺まで入つてはこれいかに
「帰らせてもらつていいかな?」

「てめー、まだ話は終わつてねえぞ!それとも逃げる弱虫か?」

「やれやれ、安い挑発だな。付き合つてられんな」

俺がまた歩みだすと

バシン!

駄犬が蹴りを放つて來たので脚を手で捕まえる

「なんの真似だ?」

「「「!?!」」」

店内中が騒然となつた、それもそうだろう酔つているとはいえLV5の蹴りをフード
で顔を隠した謎の男がなんでもないように受け止めたのだから

「てめえ、離しやがれ！」

離せと言わされたので離す

「いちいちムカつくんだよ！」

蹴り、殴り、酔つてているとはいえた中の正確だ、でも当たらない。この程度オーディンの槍さばきの何百何千の一の速さでしかない

「くそが！なんであたらねえ!!」

「遅いし、正確さに欠ける。ただそれだけだ、力任せにやつていたら弱い者や同格の者には有効だろうが、それ以上に強いものから見たら簡単に捌ける。あとここは店の中だ備品を壊してないとはいえそんなに暴れるな」

「うるせえ！」

「やれやれ聞く耳も持たないか……待たせてる者がいるんだ、眠つてろ」

俺は軽く動き、駄犬の背後に立つて

「ガハ!?……」

当て身

その場に倒れ伏す駄犬

「さて、行くぞ白兎」

「え？あれ、え？」

白兎が困惑している間に俺は先に進む。すると

「待つて」

また、背後から待つたがかかつた

「今度は何だ?」

振り向くと、金髪の子がいた：にしてもこの子、精霊の気配がするな。精霊との人の

子か、かなり低い確率なのによく生まれたもんだ

「ねえ、あなた今日ミノタウロスを倒さなかつた?」

「ん? 倒したが、それがどうした?」

「…そう、ねえ、聞きたいことがあるのだけど」

「…手短に頼む」

「わかつた、あなたは何でそんなに強いの?」

いきなり、何でそんなに強いのか：か、

「努力と才能だ、ただそれだけだ」

「…努力と…才能…ねえ、あなたから見て私は才能あるのかな?」

何言つてんのやら、そんなの

「ある」

「!…そう、よかつた、でもどうやつたら強くなれるの?」

「…そうだな。まずは自分とよく向き合つてみろ。君は何をしたいのか、何を成し遂げたいのか、君が目指すのは何か：それを知れば君はまた強くなる……帰るぞ白兎」

俺は自分の剣を見ながら深く考え込んでる金髪の子に背を向けると店を出た

「…ふう、カオスめ厄介」との星の元にも生れさせやがつたな」

「待つてください」

物思いに耽つていると、白兎が走つて來た

「遅いぞ、それじゃ帰るか」

「はい！」

その後、ベルか入つているファミリアの近くまで送つていき、帰るとまた、吸血鬼（犬）2人と小人（犬）が匂いを嗅いで来て酒臭いと言われて屋敷の裏にある露天風呂に入つているとレティシア達が入つて来て背中を洗つてもらつた、お礼に3人にも背中を洗つてやつた、一悶着あつたがいつもどおりの平和な我が屋敷だつた

プレゼント（女）そして白の心の依り代

俺は今、訳の分からん状況に立たされている

「「.....」」ゴソゴソゴソ

小刻みに動く大きな箱が9つ置かれている。俺の部屋に
どうしてこうなつた？確か……

俺は白兎と分かれてホームに戻つてカオスに顔出しをしに行つたら

『おお、戻つたか、お前に渡したいものがあるんだ』

帰つてくるとカオスが玉座のところで酒を飲みながら言つて來た

『なんだ？誕生日ならまだ先だが』

『違う違う。ほれ、そこに9つの箱があるだろ？俺とアメとオーデインからのプレゼン
トだ』

『なんなんだこれ？』

『それは部屋に戻つて開けて見てからのお楽しみ』ニヤア

とまあ、こんな感じで箱を持つて部屋に戻つて来たら。いきなり動き出したというこ
とだ

「主、これなに?」

「分からん。動いているから動物か何かだと思うが……」

「じゃあ開けて見ていい?」

「いや、俺が開けよう。カオス達がそんな事はしないとは思うが、いきなり襲いかかつて
くる動物だつたら危ないからな」

「うん、わかつた」

そして、箱の前に立つ、するとさつきまで動いていたのに急に静かになつた、……俺
にはわかる、レティシア達で学んだこれは、期待、そして待ち望んでいたものが来ると
いう気配……いやな予感しかしない

ダラダラダラダラダラダラダラ

どこからかドランムロールが聞こえる。そして、俺は箱を

ダラダラダラダラダラダラ～ダン

開けた

そして、俺に飛びかかる3つの影

「なに!? グボファア！」

腹にダイレクトアタックして来やがつた

「「わー！ やつと会えたー!!」」

「な、なんだ!? 君達は!?」

「「……」」 ポカーン

レティシア達は訳が分からずポカーンとしてるし

「あ、自己紹介をしてなかつたね。私はアルクエイド・ブリュンスタッド、吸血鬼の真祖
よ、アルクって呼んで、よろしくね」

「私はフランドール・スカーレットだよ。フランって呼んで」

「ほら、みんなちゃんと自己紹介しなくちゃ」

金髪の20歳くらいの女性、アルクと10代前半くらいの見た目をした、フランが自
己紹介をした後、後ろで、箱のところから動かなかつた、紫色の翼を生やした女性、ピ
ンク色の髪の子と水色の髪の子と金色の髪の天使を俺の前に連れて來た緑色の髪の天
使

「私はガブリエルです。これからよろしくお願ひします」

まず、緑色の髪の天使、ガブリエルが自己紹介をし

「私はミカエルと言います。これからはシン様をお守りいたしますのでよろしくお願ひします」

ピンク色髪の天使、ミカエル

「ら、ラファエルと言います。怪我をしたら癒しますので…ど、どうか捨てないでください…」

引つ込み思案な天使、ラファエル。一応そんなことは絶対にしないと言うと
「あ、ありがとうございます！」

感激したのか抱きついて来た、柔らかいものが…

「私はウリエルと申します。シン様の剣となり盾となります」

騎士気質な天使、ウリエル

「…………ルシファー、よろしく…」

無口な天使、いや墮天使、ルシファー

一応、返事をしどくか

「ああ、よろしく、1つ聞きたいんだが、君達は俺の事をどう思つてるの？」

「…………／＼／＼……」

おつけい、今の反応と君たちの顔で大体わかつた、…もう疲れたよパト〇ツシユ

まあ、それは置いといて、後ろで俺を見つめる白髪の女の子とガクブル震えてる小学

生くらいの女の子。俺はその子達に近づくと白髪の子は俺をずっと見つめて、もう一人の子は震えがぴたりと止めると俺を凝視して来た

「君達は？」

「…私は涼科百合子、よろしく」

綺麗な赤い瞳で俺を見ながら自己紹介をした、そして俺はずつと膝を抱え込んで俺を

見つめるもう1人の子を見る

「君の名前は？」

断じて君の名ははじやない

「…し、白…です…」

白か、だがなんでここまで怯えてるんだ？カオスに聞くか

『カオス』

『ん？どうした？』

『白って子の事なんだが、なんでここまで怯えてるんだ？』

『ああ、それはなその子がいじめられていて対人恐怖症だからだよ。本来だつたら白の義兄がいたんだが、その子はその義兄がいらないという世界線から来た子なんだ、あまりにも辛そうだったからその子を連れて來たつて訳だ』

『そうか、…どうしたら良いと思う？』

『そればつかしは分からん。時間をかけて行くか、お前が白の心の依り代にするために一気に近づくかだ』

『わかつた』

俺はカオスとの念話を切ると

「なあ、白」

「ツ…な、なに？」涙目

「嫌かも知らんが我慢してくれ」

「え？」

ギュッ

「ツ！？は、はなし」

「辛かつただろう」

「ツ！」

「今まで頼れる人がいなくて心をずっと閉じ込めて、誰とも関わらず独りで過ごして来て」

「……」

「寂しかつただろう、辛かつただろう、苦しかつた、痛かつただろう。でもなここにいるみんなはそんな事をするような奴らじやない。君を苦しめて来た物じやないんだ」

11

「もし、君が辛いと言うなら俺がみんなが君を受け止めよう。苦しいなら痛いなら俺がそれを背負おう。寂しいなら、俺たちが君の側にいよう。だから…俺たちを信じてくれ」

「ヒッグス……本当に信じていいの？白がいていいの？白を受け止めてくれるの？」

「ああ、約束しよう。俺は君を独りにしない、だから今まで抑えて来た感情を出してもいいんだ」

「グス……う、うええええん!! 辛……かつた! ずっと独りで、……誰も白を……見てくれなくて、白を……いじめて……グス、うわあああん!」

ギュッ！

「大丈夫（よ）、私（りり、ヴァンピイ）達がいるから」

願わくば白がこの先、幸せに生きていくように

俺も白を独りにさせないようにしなくちゃな

「スウ……スウ……」

あれから泣き疲れたのか白は安心したような表情で寝た
「ありがとな君達」

みんな、本当にいい子だ

「いえ、当然の事をしたまでです！」

「私は……別に……泣かれるのが不満だつただけよ」

百合子は俗に言うツンデレのようだ

「あれれ～？ 百合子さんってツンデレだつたんですかあ～？」

「～～!! う、うるさい！」

ギヤーギヤーワーワー

また、騒がしくなりそうだ、歓迎会は明日にするか

ベルの稽古と歓迎会

『オラリオ城壁』

「よう、早かつたな」

「あ、シンさん！」

俺は昨日のベルとの約束で城壁に来ていた

「それじゃ、早速だが、始めるか」

「はい！よろしくお願ひします！」

なんだかんだで、終了……え？ 稽古風景見せろつて？ 男2人の汗がキラキラ輝く青春
系が見たいの？
しようがないなあ

『よし、まずはベル。お前の実力が知りたいから攻撃してこい』

あ、もちろんベルの武器は木の短刀だ
『わかりました、では行きます！』

ベルは俺に向かつて突つ走つて來た、ナイフを使うなら速さが肝心なんだが、今のベルじや遅い。

『ハツ！』

『そんな風に斬つたつて当たらんぞ、肩に力が入りすぎてる。もつとリラックスしろ』
そう言いながらも俺はベルの猛攻（笑）を避けていく

『は、はい！』

とまあ、こんな感じだ、その後はベルと別れて、店が並ぶ所まできた

「……お？ おっちゃんこれはなんて言うんだ？」

「ははーん？ さてはオメエ最近オラリオに来たばつかだな？」

「そうだな」

「これはなじやが丸くんつて言うもんでなオラリオの名物の一つだ、一つ買つてくか？
小豆クリーム味もあるぞ」

「そうだな、じやが丸くんとじやが丸くん小豆クリーム味を一つずつ貰おう」「よし、70ヴァリスだ」

いつも通りポケットに入れて空間収納からヴァリスを出して

「ほい」

「毎度！」

さて、買つたはいいが、どこで食べようか…お、あそここのベンチが空いてんな
「よいしょ…さて、じゃが丸くんはどんな味なのかね…」

「あーん…ほう、これはまた

「なんて、感想を言えばいいのだろう。この世界にもジャガイモってあつたんだ」

感想の一言がそれとは我ながら何を言つてんだか

「すまんな。小豆クリーム味はさつき買つていつた兄ちゃんので最後でよ」

「そう…なんだ」ズーン

……なんか、見知つた顔がさつき俺がじゃが丸くんを買つた店の前で落ち込んでる

「はあ、…小豆クリーム味…」

おうおう、こつちに向かつて來たな

「……あ、」

おう、見つかつた

「よお、昨日ぶりだな。おはよう」

「え、あ、うん。おはよう」

「どうしたんだ、そんなに落ち込んで」

「それが、じやが丸くん小豆クリーム味が売り切れてて」

「じゃが丸くん好きなんだ……あ、それなら

「なら、いるか?」

「え?」

俺は横に置いていた紙袋の中からじゃが丸くんを出した

「ほれ、食べたいんだろ?」

「…いいの?」

「気にすんな。俺はもう食ったから、それと、さつきから立つてるとも疲れるだろ? 座つたらどうだ?」

「そうだね…それじゃ隣、失礼します」

金髪の子が俺の隣に座つた…近くありませんかね?

「モツキュモツキュ♪」

本人はじやが丸くんに夢中のようだ…天然か?

「美味しかった、ありがとう。あ、お金」

「ああ、大丈夫だつて言つただろ? お金の事も気にすんな」

「でも…」

んー、これはかなり強情だな。：それなら

「じゃあ、君の名前を教えてくれるか？」

「え？…そんな事でいいの？」

「何言つてんだ、美少女と顔見知りになれて、名前も教えてもらっちゃ男冥理に尽きるつてな」

「美少女？私が？」

「おいおい、自覚なしか、君はかなり顔がいいぞ？近寄つてくる男いなかつたか？」

「わかんない。いつも私に近づいてくる気配があつたと思つたら、ロキカリヴィエリアかレフイーヤがその気配に向かつていつて、気配がなくなるから」

……怖

「なるほど、それはまた、愛されてますね」

「愛…されてる？」

「だつてそだろ？同じファミリアの人達から守つてもらつて、愛されてる以外なんて言うんだ？」

「愛されてる…私が…」

なんか、思うところがあつたのかな？

「あ、名前、言つてなかつた、私の名前はアイズ。アイズ・ヴァレンシュタイン。ロキファ

ミリアに所属しています。貴方の名前は?」

「俺はシン、カオスファミリア団長だ」

「シン…シンね。よろしくお願ひします」

「ああ、よろしくアイズ……と、もうこんな時間か、すまんなアイズ、この後ファミリアでやる事があるから、またな」

「え、うん。またね」

そして、俺はアイズと別れた

そして、ファミリアに帰つて来て、8階の食堂

「それじゃ、白達の歓迎を祝つてかんばーい!」

「「「「かんばーい!!」」」

とまあ、見てわかる…ん? 読んでわかる通り? …まあいいや絶賛歓迎会中だ、いやー、まいつたまいつた、朝起きたらいつもの3人もだがそこに白とガブリエルとラファエルも加わつて來たんだ…やわらk

「ご主人…?」

ひ、ヒエーーー! レティシアがこつちを真顔で見つめて來た

「な、なんでもないよ…」

「そういえば、白のことなんだが…なんか、懐かれたというか、離れなくなつたとい
うか

「シンにい？どう…したの？」

「とまあ、何故かにい…兄と呼ばれるようになつた、なんでそんな呼び方なんだつて聞
いたら

「だつて…一緒に…いると、落ち着くから。でも、なんか、にいつて…呼んだらなんか…
別の人を呼んでる…みたいで嫌：だつた」

「よくわからんが、白が安心してくれてるなら良しだな
「そうか」

「俺は白の頭を撫でた

「ん…♪」

「甘える子猫みたいで可愛い

「それじゃ、一人一人に顔を合わせに行くかな」

「白も行く」

「やあ、百合子、楽しんでるか？」

「…まあ、楽しんでるよ」

「そうか、これからはここが君たちの家になるからな。家にいてつまらないなんて言わ
れたら傷つくからね」

？」

「ていうか、この城もそうだけど、下に広がつて森もあつたけど、ここつて一体なんなの
界とオラリオにあるあの門と繋がつたて訳だ」

「……頭痛くなつて來た」

「ハハハ、ごめんな。でもまだ色々あるから見て いつてくれよ」

「わかつた」

そして、四天使、墮天使、アルク、フランと顔合わせをして、軽い談笑をしてから歓

迎会は幕を閉じた

ベッドに何人か潜り込んでくる気配がしたけど、断固無視する

ファーストキスは幼女と、箱庭にGO

はい、どんも読者のみなさん。俺です。シンです。え？メタい？知らんな。
さあ、突然ですが、問題です。

俺は今、どういう状況に立たされているでしようか？

正解は、

「ねえ、シンにい、キス：しよ？…」

はい、白に迫られております。何がどうしてこうなつた？

「あ！…ずるいです！リリもしたいです！」

「あ！ヴァンピイちゃんが先なの！」

「ご主人？もちろん私が先なんだろうな？」

「私もしたーい！」

「フランもフランも！」

……ブルータス！お前もか！

てか、なんなの？白とりりは置いとくとして、会つて間もないフランとアルクまで、なんなの？発情期なの？万年発情期なの？そんなのは兎だけにしとけや
てか、マジでどうしよ？……キスしちゃう？……でもなあ、俺以外にももつといい男はいるだろうし、俺の親友の十六夜とか、てかあいつ今何してんのかね？あいつ俺と会う前までは自分の人間離れした力に恐れられて誰も近づかなかつたしなあ：あ、話が脱線した、ガチでどうしよう？

シ……シン

ん？オーデイン？

ああ、儂から助言しとこうとな

お、マジか、どうすればいい？

ヤつちやえ☆

おいいいい！？

あ、辞めろ！アメ！やめ…ああああ！！

大丈夫かい？シン

ああ、良かった、アメか…どうすればいい？

……えつとね……まあ、…頑張つて？

……おいおいおい、死んだわ俺：

だ、大丈夫だよ！ できても僕たちも世話するから！

つまり、白たちとやれど？ まだ、10代前半の子を含めた子たちとやれど？ ……い

やーです☆

で、でもほら！ 子供が成長していく様子を見るのもいいもんだよ！

……確かになあ

ほ、ほらね！ だか r

なあ？

な、なにかな？

今日の歓迎会の時の飲み物の中に何かいれただろ？

う！ ……

変なんだよなあ？ 白たちの口から酒や白が飲んだオレンジ以外に何か別の匂いがするんだよなあ？ ……なにいれた？

い、いや！ 僕たちは何もいれてないよ！

……G 1万匹（ボソツ）

はい！白君たちが飲んだ飲み物の中に遅効性の媚薬を入れました！

ほーう？なぜ？

い、いやそれは…

なぜ？

だから…

なぜ？

…

なぜ？

…ま、孫が見たかったからです

孫？お前たちに孫どころひ孫が何人もいるはずだが？

だつて、僕はいないけど、カオスたちは偶然生まれた様なもんなんだもん。直接的に
は血が繋がつてないし

神に血つていうのも可笑しな話だが、まあお前たちがこんな事をしでかしたのはわ
かつた、だがそれは今すぐつて訳にはいかない

わかつた…でも

ん？

その媚薬なんだけど、時間が経てば経つほど効果が強くなつていくもので

……つ、つまり？

こうして僕と念話してる間にもさらに白君たちはハツチャケるってこと嘘だ！

えつと？…所がどつこい、夢じやありません現実です？

ああんまりいいだあ！！

頑張つて…

元はと言えばお前たちが招いたたn

「チユ」

…………チユ？

「ん…ふはあ…えへへ、シンにいと…キス・しちやつた」

…………ヘエア！？

「あ…ずるいです！リリが一番にしたかったのに！」

「ずーるいー!!」

「まあいい、2番目は私がだよな?」

「んー、私は後でもいいかな?」

「フランも後でいいかな? あ、血も吸つてもいいかな?」

に、逃げるんだあ、勝てる訳がないよ!」

「ちょ! 離れてくれ!」

「え? ……シンにい・白を独りにしないって… いつたのに…うう」

o r z

「わかつた! わかつたから! 離れなくていいから! だから泣かないでくれ」

「ほんと? ……えへへ、よかつた……ねえ、シンにい? ギュッとして?」

「わかつた…これでいいか?」

「うん♪」

白に抱きつきナウです。白のサラサラの髪が近くに…あ、シャンプーの匂いがする…
は?!

「ねえ、リリにもしてくれるんですよね?」

「してくれないと、泣いちやうよ?」

「ご主人?」

「私もー」

「フランもー」

おいおいおい、しようがねえなあ（サイヤ人風）：俺は（そこまで言われたら）止まんねえからよ…だから…止まるんじやねえぞ（なんに？）

この後、メチャクチャハグ＆キスした

「はあ～、疲れた」

俺は昨夜の事を思い出しながら、城の玉座の間に来ていた

「お、シン」

「んあ？ カオスか」

「・・・」

「どうした？」

急に黙り込みやがつて

「…昨夜はお楽しみでしたね w」

「ぶるあああああ！」乖離剣工アを構え

「おおおおお!?すまん！冗談だ！」

「うるせえ！お前だってアメ達とグルだつたんだろうが!!」

「…チツ、バラしやがつたな（ボソ）」

「遺言はあるか？」

「おい？シン？顔は笑ってるが、目は笑ってないぞ？」

「安心しな。痛くしてやるから」

「すんませんでした！」

⋮見事なまでのジャンピングD O ☆ G E ☆ Z A ☆

「はあ、まあいい。ああ、それと俺少しの間、別の世界に行つて遊んでくるから、あいつらはまだ寝てるから起きたら俺は少しの間、遊んでくるつて言つといてくれ」

「わかつた：何処の世界に行くんだ？」

「確か：箱庭とかいう世界だつたか？他にも色々行つてくるけど」

「了解、あの子達を悲しませないようになこの世界の時間を遅らせたかぞ？（にしても、箱

庭か、…面白くなつてきたなあ）」

「ああ、ありがとう」

「あ、それと、箱庭に行くなら俺たちのコミュニティの新しいリーダーになつといてくれ」

「ああ、確か箱庭にはコミュニティとかいう組織があるんだつたな。てか、もうコミュニティ作つていたのかよ」

「ああ、箱庭の中でも上位だからな。アメがもう説明しているだろ」

「おけ、ほんじや行つてくるわ」

「いつてらー」ノシ

そして、俺は空間を操つて箱庭に向かつた

箱庭でもリーダーになりまして

やあ、俺だ、シンだ

ん？今の俺の現状か？…最悪だよ

「シン様！更に追加の書類が！」

俺のいる部屋に書類を持って黒い髪をした和服の女性が入って來た

「わかった、そこに置いといてくれ」カキカキ

「わかりました：差し出がましい事は存じておりますがシン様」

「なんだ？」ハンコローン

「お休みになつてください。昨日から寝ずに働いて…」

「…わかった、その書類が終わつたら休むとしよう」カキカキ

「よかつた（ボソツ）：それでは失礼します」

そう言えば具体的な説明をしてなかつたな。…まあ箱庭についた俺はカオスたちの
コミュニティからの迎えが来て、箱庭の二桁と呼ばれるところに來た、コミュニティの
名前は『高天原』だつた、どうやらアメのコミュニティでカオスとオーデインのコミュ
ニティは別々にあるらしい。それで高天原なんだが、なんか凄いほどの規模のコミュニ

テイだつた、敷地の広さもそうだが、敷地内のほとんどが森だつた、いや森というのも語弊があるな

森、川、湖、滝、山、世界樹、そしてそれらに住む神、精霊、元魔王などなど……ん？なんか色々おかしなのがあつた気がするが、まあいいか

とまあそんな訳で俺はこのコミュニティのリーダーになつた、因みに今さつきの女性はアマテラスだ、綺麗な黒い髪の合う和服美人だ、首にかけてたのは多分八尺瓊勾玉だろう。

「…………」カキカキ

◆? ◆? ◆?

「……よし」ハンコポーン

「それでは書類はこちらで運びますのでお休みになつてください」

「ああ、わかつた、ありがとうなアマテラス」

「い、いえ！それが私なんかにできる事ですので：／＼／＼」

……なーんで頬を赤く染めるんだ？ボクワカラナイ……とと、一瞬現実逃避してたな。それより

「そんな自分を卑下しないでくれ。アマテラスがいてくれてかなり助かってるから」

「ツ…するいですよ（ボソ）」

「ん？ 何か言つたか？」

「いいえ。なんでもありません。それでは失礼します」

アマテラスが書類を持つて退室すると、俺はこの執務室の隣にある部屋に移動すると、布団で寝た

◆？ ◆？ ◆？

「…き……もう……に…」

……ん？ 誰かが喋つてる声がするな。起きるか

「ん…んん~」

やつべ、背伸びしたらゴキゴキつてした

「わわ！ お、起こしちゃいましたか？」

そこには綺麗な銀髪そして髪の先は若緑色と不思議な髪をしたアマテラスと同じ和服の女の子

「…ツクヨミか、どうした？」

「あの、台所をお借りしてお夕食を作りましたので…その…」

よく見ると、部屋にある机に2人分の夕食が置いてあつた……2人分?

「なるほど、ところでなぜ2人分もあるんだ?」

「あわわ!…そ、それは…シン様と一緒に…ボソボソ」

なるほど、もう可愛いな。昨日からだけどつい撫でてしまう

「あ、あの。これは…恥ずかしい…です//」

「とと、すまんな」

俺がツクヨミの頭から手を離すと、ツクヨミの口からは「あ…」って聞こえたから、また後でねというと顔を真っ赤にして頷いた：可愛い（確信）

そして、俺はツクヨミと話をしながら夕食を摂った

「なるほど、そのーーーっていうコミュ二ティはその魔王によつてかなりの被害をうけたのか」

「うん。箱庭の騎士と箱庭の貴族と呼ばれる人たちがいたコミュ二ティだつたからそれなりに有名だよ。なんでも箱庭第十席の白夜王、今は白夜叉だつたかな?その人とも交流があつたようだし」

「で、今は旗も名も奪われノーネームになつたと、そこも大変だな」

「なんでも魔王に襲撃される数日前に箱庭の騎士が何者かに攫われて箱庭の外に売られ

たって話だよ」

「なるほど、もし魔王に襲撃された時にその箱庭の騎士がいたら少しは変わっていたかもな」

「そうだね」

「「ジ」馳走様」

「さて、それじやあツクヨミ。急だが俺は明日にはコミュニティを離れるよ」

「え？」

そんな大切な人から離れるような顔をしないでくれ

「ああ、いや、もう永遠に離れるつてわけじゃないぞ？俺にもまだ色々やることがあるからな。それが落ち着いてきたらまた来るさ」

俺がツクヨミの頭を撫でながら言うと、渋々納得したのか不満そうな顔をしながら

「…わかった、シン様も大変な立場ですもんね」

「すまんな。絶対また来るからさ」

「うん…ねえ、だつたら今日は一緒に寝てもいいかな？」

…以外だな、ツクヨミは物静かな子だつたけどこんな大胆な事を言いだすとは

「…まあ、いいかな。それじやあ布団は出しどくから皿の片付けをしといてくれないか

?」

「うん、わかつた：一緒によかつたけど、仕方ないか、シン様の鈍感（ボソツ」

なんか、またツクヨミに小声でなんか言われた気がする。にしてもツクヨミも最初の頃と変わったよなあ。最初来た時はアマテラスの背中に隠れてビクビクしながら話してたけど、昨日の夕食の時に色々話してたらまあ意気投合しちゃって、それから昨日と今日の付き合いなのに俺にべつたりになつて、少し聞いてみたら一緒にいると落ち着くつて言われた、まあ兄か父みたいに思つてはいるんだろう。そういうえばスサノオは何処にいるんだ？って聞いたらまた勝手に魔王に喧嘩を売つてきたから折檻中らしい：魔王には勝つてコミニニティに隸属させたらしい。確か名前がペストとか言つてたな。ペストつてあれだよな？黒死病のことだよな？……なんで勝てたんだ？スサノオの話を聞く限りじやスサノオはかなりの脳筋のようだし……まあいいか

よし、布団は敷き終わつたからツクヨミの手伝いにいくか
「フンフンフーン♪」

ツクヨミが鼻歌を歌いながら皿洗いをしていた

「ご機嫌だな？」

「うひやあ!? あ、シン様ですか脅かさないでくださいよ！」

「すまんすまん。ツクヨミがご機嫌で鼻歌を歌つてたから入るタイミングがわからんなく

てな

「うー、聞いてたんですか？」

うん、ツクヨミには悪いけど

「バツチリ」

「うー！恥ずかしい」

ハハハ、ツクヨミが真っ赤な顔を隠すために持っていた皿で顔を隠して

「ほら、皿洗いをさつさと終わらせようか？もう遅いからな」

大体今は九時三十分でところか？

「う、うん」

ふむ、なんかこうやつて肩を並べて皿洗いをしてると、まるで

「夫婦みたいだな（ボソ」

ガシャーン！

ツクヨミが皿を落とした

「うお、どうしたツクヨミ！？大丈夫か！？」

「ほえ？…あ、お、お皿！ツ！痛い…」

「触るな。俺がやるからツクヨミは手を見せろ」

「え？ う、 うん」

ツクヨミの手を見ると綺麗な指から血が流れてた

「まったく、 女の子が危ない物に触るもんじやないぞ？ 綺麗な手を傷つけてしまう
う、 うん／＼」

「さて『ヒール』、 よし」

俺が回復させるとツクヨミの傷は無くなつていき綺麗な手に戻つた

「あ、 ありがとうございます」

「大きな破片は俺が集まるからツクヨミは箒と塵取りを持つてきてくれ」

「わかった」

そして、 俺が破片を集め終えるとツクヨミが箒と塵取りを持つてきたので綺麗に集め
ていく

よし、 終わったな

「ゞ、 ゞめんなさい」

「気にするな。 そんなことより俺はツクヨミが怪我したのが心配だつたぞ、 それに一体
どうしたんだ？ いきなり皿を落として」

「そ、 それは…シン様が、 ふ、 夫婦みたいって／＼」

ああ、なるほどつい口に出てたか

「それはすまんかつたな」

「ううん、そんなことないよ」

そんなことないとは一体どういうことだ?……なんか、聞いたらまた過去にあつた二の舞になりそうだな

「……さて、皿洗いも終わつたから。寝るか?」

「うん」

「あの、シン様?」

ツクヨミが布団に入つて俺の名前を呼んだ

「なんだ?」

「さつき、また後でつて言いましたよね?」

:ああ、頭を撫でることか

「それか、なら撫でようか?」

「うん♪」

ツクヨミが俺の布団に入つてきた:なんか背筋に冷たい何かが走つたな

「なんで入つてきて…まあいいか」

いやな、あんな捨てられた子犬みたいな目でこっちを見てきたんだ、今更布団から出でいけなんて、とてもじやないが言えん。まあ言うつもりは無かつたが

「♪♪♪」

ほんと、俺が撫でると顔を赤くしながらいい笑顔をするよ。てかそれよりも眠い。やはり布団の中に入つていると眠くなるな

「…眠いの？」

「ああ、眠いな」

「そつか、寝ていいよ？」

「そうか、なら寝させてもらうとするか、おやすみ」

「うん、おやすみ。シン様」

そして、俺はツクヨミを撫でながら眠つた

オラリオよ私は帰つてきたあ！

はい、戻つてきましたオラリオ

いやー、箱庭を離れるつて言つた時は結構な騒動になつたんだよなあ。結局スサノオとは会えんかつたし他にも色々な神々が見送りに来てくれたんだけどな。フェンリルとヨルムンガンドとヘルがまさかここにいたとは：ロキの話をしたら「ああ、あの性懲りもないエロ親父のことね」つて口を揃えて言つたのは面白かつた、てか全員女だつたのねてつきりフェンリルとヨルムンガンドは男？雄？まあ人の姿をしてたから、男だと思つていたんだけどな

でまあ、ファミリアに帰つて來たわけなんだけど、3時間しか経つてなかつた、てかどうしよう？やることないから暇だな。またオラリオを散策するか、白を連れていくかな

◆？◆？◆？

「白ーいるか？」

「どうしたの…？」

「いたいた、まだ俺の部屋にいたか

「いや、オラリオを散策しようかなと思つてな」

「オラリオ？…シンにいと一緒なら」

「それなら行こうか」

「フランも行つていい？」

「あ、私も！」

「私も服を買いたいからいいかな？」

「フランとアルクに百合子かそう言えばこの子達の服は俺が作つてたな。創造で

「それじゃあ行こうか？」

「「「うん」「」」

◆？◆？◆？

やつて来ました服屋

「ねえねえこれどうかな？」

「フランこの服気に入つた！」

「白は…この服…どうかな？」

「あ、この服いい」

アルクがシンプルな基本の色を白にして赤い模様の入つた服を持つて来て、フランがいつも着ている服に似た服を持つて着て、白が水色の和服を持つて着て、百合子が学生

服に似た服を持つてきた、…なんで学生服に似た服があるんだ？

「ああ、みんな似合つてるよ」

「「「ツ／＼／＼」」

「それじゃあ払いに行こうか」

で、買ったわけなんんですけど、はいそこの店員！ニヤニヤしない！あれか？側から見たら俺が父でアルクが母、そして百合子が長女でフランが次女で白が末っ子に見えたのかな？…まあいいや、てかもうマント取つていいかな？あれからそれなりの時間経つたからある程度は治まつていると思うし

パサツ

ふう、正直外出るたびにマントを羽織らなきやいけないってのは面倒だつたんだよな

「おい、あの男…」

「ん？…な!?あの戦争遊戯の時のカオスファミリア団長！」

「ねえ、お母さんあの人」

「?…カオスファミリア団長」

ヒソヒソ…

うん、騒がれないとは言えヒソヒソされんのはな…そういえば、アイズつてマントを被つた状態の俺と普通に話してたんだよな…不気味じやなかつたのかね?

「シン、私お腹すいた」

アルク：確かにもうお昼時か、うーん俺もあまり食事処知らないんだよなあ

「俺もそこまでお店を知つてるわけじやないが…そうだ、こん前行つた豊饒の女主人で

いいかな?」

「そこでいいよ」

「「私（白）もそこで」

◆？◆？◆？

さて、やつて来ました豊饒の女主人。前來たのはあの駄犬がいた時か

「いらっしゃm…!」

確か、シル君だつたかな? そういうえばこの子の前でもマント被つてたんだよなあ

「にや?…スンスン…あ、あん時の白髪頭と一緒にいた人にや!」

お? そういうえば匂いは消せなかつたな。これは失敗失敗

「え? ジやああの時ベルさんと一緒にいた人ですか?」

「まあ、そうだな。あの時は面倒を起こしてすまなかつた」

「いえいえ、大丈夫ですよ。ミアお母さんも面白いものを見れたつて行つてましたから」

ミアお母さん？…ああ、厨房から話しかけてきた強そうな人のことか、忘れてた

「それでは、席に案内しますね」

◆？◆？◆？

「ふう、やっぱり美味しいなこここの料理は」

前来た時に食つたスペゲティを食つた、はい美味かつたです

「うーん、美味しい…血も飲みたいなあ」チラ

血飲みたいって言つた後、こつちを見るなフラン。さて、支払つてくるか

ほんと、ファミリアに帰つて來たんだけど、え？急すぎる？いやだつてなあ支払い終わつた後帰る途中にヒソヒソ話されるくらいやつたし。あ、それと、俺がマントを脱いだからか俺たちのファミリアに入りたいって人が大量に來てんだよなあ

「おーい、カオス。入団希望者が来どるがどうする？」

「帰つてもらつてくれ。俺たちのファミリアに入れる予定のやつなんか今んとこおら

ん

「おけ」

で、門の所に来て、入団希望者全員断つたんだけど、下心丸見えやな。全員レティシ

アやアルク達狙いだつた

「やつぱり。あの子達狙いだつたか?」

「わかつてたのか」

玉座の間に戻つてくるとカオスが聞いてきたから返すと

「そりやあな。あんな美人美少女なんだ、狙つてくる男どももいるだろ。まあ手を出そ
うとするとあの子達が反撃して、命の保証はできんがな」

まあ、それもそうか白は戦闘能力はないけど、他の全員半端ないほど強いからな。フ
ランは4人に分身できるし、百合子は全て反射させるしアルクは…うん、あれはチート
や。え?俺が言うな?知らんがな

「それじゃ、俺は戻るぞ」

「ああ」

そうそう、ミカエル達は全員ドラゴンやグリフォン達と稽古してる。ルシファーは書
庫に籠つてる。なんでも小説にハマつたんだと、だから俺がちよいと空間弄つて書庫に
ネットが繋がるようにした、ネット通販は流石に無理だがな。初心者が書いた小説つて
のも面白いからな。で、その時知ったんだが、この世界つてアニメの世界だつたのねし
かも白達も所詮アニメの世界の住人でした、なんか複雑
ま、そんなわけでいつも通りなカオスファミリア内でした、うん?どうした白、え?

ゲームしたい？ そういえば白はゲームが得意だったね。 それじゃあ大乱闘スマッシュ○
ブラザー○しようか

白強すぎ o r z

媚婦の狐人とアイズ達とのお茶会

ベルの稽古をした後、ちょいと暇だったんでオラリオをまた散策します。

え？ 今どこいるかだつて？……たぶん…ほら…あれだ…媚館みたいなのが並んでる
とこ

うーん、どうしようかね？ ブラブラしてたらこんなとこに来たわけなんだけど、すん
ごい見られてる。獲物を狙う目してる。正直怖い。逃げるか

「あ！ 追え！」

「おおおおお！」

◆？ ◆？ ◆？

ふう、逃げ切れた、どこかの路地裏みたいなとこに来たな。：ん？

「…………」

……なんか、近くの建物の2階から狐人が見てるんですけど、どうしようか…手で
も振つてみるか

「つ…アハハ」ノシ

おお、振り返してくれた、でもこのエリアにいるつてことは媚婦なんだよな？…お金

に困つてゐるのかな?

「あ、あの!」

「うん? 相手から話しかけてきたな

「何かな?」

「こ、ここに来たつてことは、その、私を…しに来たんですか?」
……勘違いされてんなこれ

「いや、ちよいと迷つてしまつてな」

「ま、迷つたんですか?」

「ああ、暇つぶしにオラリオの散策してたらここに来てしまつて」

「…ふふ、そうでしたか」

「こつちから声が聞こえたわよ!」

「こつちか!」

あら、逃げ切れてなかつたか

「すまんな。まだ追われてたんだつた」

「そうだつたんですか、あ、あの」

「ん?」

「また、来てくれますか?」

出来ることならあまり此処には来たくないんだが

「ああ、また来るよ。俺はシンだ」

「シンさんですね。私は春姫、サンジヨウノ・春姫と言います」

「春姫だな、また来るよ。それじゃあな」

「はい」

俺は春姫とまた会うという約束をして、このエリアから出た

◆? ◆? ◆?

ふう、やつと出れた

「あ」

ん?

「シン?...」

振り返るとアイズがいた、後ろに露出の激しい服を着た女の子2人たぶんアマゾネスだな。それとエルフ
「アイズか、どうした?」
「たまたま見かけたから、…なんで繁華街から来たの?」

「そ、それはアイズ、男なら行く用事があるからさ」

「後ろにいたアマゾネスの短髪の方の子が盛大な勘違いをアイズに教えやがった
『残念ながら違うさ、オラリオを散策してたら繁華街エリアにいてな。まあちよいと
追っかけられたがな』

「あ、そなんだ、ところでさ」

「うん?」

「貴方つてあの時の戦争遊戯のカオスファミリアの団長だよね?」

「そなだが」

「わあ!ねえねえ!なんでそなに強いの!しかもあのドラゴンつてなに?!」

「元気な子だな。ていうか、初対面の俺によくそなに近づけるな。ていうか抱きつい
てるし…うーん、この子の胸が…は!なんか背筋にゾッてきた
「わかつたから、そなにひつつくな」

「あ、ごめんね」

「ねえ、ここで話すのもなんだしその店で話さない?」

アマゾネスの長髪の子が提案してきた

「そうだね。そうしよ!」

「私も聞きたい」

「もう、アイズさんが言うなら」

不満そうだなエルフの子は

で、場所を変えてお洒落な店のテラスに座つたわけだが

「それで、なにを聞きたいのかな？」

「はい、いつシンさんとアイズつて出会つたの？」

「ここに来る途中に互いの名前を教えて、短髪の子、アマゾネスの双子の妹でティオナ
というらしいそして姉のティオネ、エルフのレフィーヤ…この子がレフィーヤか、てい
うか俺もアイズに近づいてるわけなんだけど、襲われないよな？」

「アイズとは…戦争遊戯の時か？そして豊饒の女主人であつて、次にオラリオ中心の噴
水のどこでかな？」

「うん、いつもマントを被つてたけど」

「え！それじゃあ豊饒の女主人でベートを一方的に弄んだ、正体不明の人つてシンさん
だつたの？」

「そうだな」

「わあ！やつぱり強いんだ、ベートつてあれでもLV5なんだよ？それなのにまるで子
供を相手しているようだつたよ」

「あれで、LV5か…はあ、これじやあオラリオ最強にも期待できそうにないな」

「え!?あの猛者にも勝てるの?でもLVが一つ違うだけでかなり強さは違うけど」

「そのようだな。それじやあその猛者はたつた1匹いるだけで世界を破壊することが出来る生物に勝てるのか?」

「そ、そんな生物はいないよ?」

「いるぜ」

「「「え?」」」

それがいるだよなあ。俺の配下にもいるが、ダンジョンの200階層からそんなのがうじやうじやいたし

「一応言つとくが、冒険者三大難関クエストのあの3匹以上に強いやつはいる。ダンジョンの更に奥深くにな」

「「……」」

「行つたことあるの?」

アイズが聞いてきた、そりやあ気になるわな。一番強いと言われてるあの龍以上に強いのがいるって聞いたら

「あるな。一応団員の戦闘が出来るやつらはかなり奥深くまで潜れるし、俺を除くと一番奥深くに潜つてるやつで大体100階層くらいか?」

まあ、それはアルクや百合子は除くがな。あいつらも含めたら更に奥深くに行くわ。
ああ、そういえばレティシア達のステータス更新してないな。帰つたらするか
「……」

いや、そんな黙んじゃないでよ、空気が重い

「それで、他にあるかな？」

「あ、そ、それじゃあ、あのドラゴンはなに？」

「あれは、風龍アルグリンっていう龍でな。といつてもまだ弱い部類の龍だけど」

「あ、あれで弱い？」

「ああ、大体ダンジョンの80階層の魔物くらいだ」

「…もうなにから驚いたらしいのかわかんなくなってきた」

まあ、普通の人ならそんな反応だよな

「それじゃあ……」

◆？◆？◆？

ティオナ達からの色々な質問をされて気づけば夕暮れ時だったのでここでお開きになつた、ていうか、ティオナ、いきなり恋人はいる？って聞かれた時は驚いたな。いな

いつていつたらよし！つてガツツポーズしてたし、そん時のアイズが胸を押さえてティ
オナを見てたのが、気になつた

「今日はありがとう。またね♪」ノシ

「ああ、こちらこそありがとう。色々聞けてよかつた」

さて、ファミリア（家）に帰るかな

二つ名

『ガネーシャファミリア』

「ここはガネーシャファミリア。」

「今夜は神会^{デナトウス}が行われるのだ、更にその二つ名を授ける者の中にシン、ヴァンピイ、レティシア、流石にまだカオスファミリアに入ってきた新参者であるアルクやフラン達はまだ恩恵を刻んでないので二つ名を授けられることはなかつた

「皆の者、俺がガネーシャだ!!」

会場に像のマスクを被つた男、ガネーシャファミリア主神、ガネーシャが高らかな声を上げて会場に入ってきた、因みに会場の入り口は大きなガネーシャの…あそこ…つまり股間なので神々はそこに頭を悩ませている。団員もあるが

「それでは!毎度お馴染み冒険者達の二つ名を授けようと思う!」

「「「うおおおおおおお!!!」」」

ガネーシャの二つ名を授けるという宣言の後に多くの神々（男）達が雄叫びを上げた

「それではまず、…の子供の二つ名だ!」

「邪眼心眼!」

「闇の炎！」

「爆炎騎士！」

そういうえば、言い忘れていたが、神々のネーミングセンスはほぼ壊滅である。わかりやすく言うなら厨二病というやつだ

「それでは！ 爆炎火炎爆炎で異論はないな!?」

「「「おう!!」」」

「あ”あ”あ”あ”あ!!」

厨二病の二つ名を宣言する者、その名前を付けた神々はいい笑顔をしながらサムズアップをし、団員の二つ名がそんな名になってしまった事に絶望している男神……もはや地獄絵図である

そして、そんなところから離れたテーブルの上にある料理が下から出てきた手に掴まれ消えていく不思議な現象が起きていた

「なにやつてるのよ、ヘスティア」

「ツ……なんだ、ヘファイストスか」

そのテーブルに近づき背を低くして隠れていた、一部だけでかい少女に話しかけた、

赤い髪に眼帯を嵌めたグラビア顔負けの美貌を持つ神、鍛治神ヘファイストスである。そして、少女とは黒い髪をツインテールにした神、竜の神ヘステイアである。

「なんだ、ヘファイストスか、あ、そうだヘファイストス！」

「お金ならもう1ヴィアリスも貸さないわよ」

「ち、違うよ！……お願ひだ！ベル君に武器は作ってくれないか」

ヘステイアは真面目な顔をすると、拍手喝采が起きそなほど、見事なジャンピングDO☆GE☆ZA☆

「……どういうこと？」

「僕はベル君に何もしてあげれないんだ！僕はいつもベル君に世話になつてきた、でもこのままじや駄目なんだ！僕もベル君の役に立ちたいんだ！」

「……」

ヘステイアがヘファイストスに自分の思いをぶつけるとヘファイストスは黙り込んだ、数分後についにヘファイストスが根負けした

「はあ、わかつたわよ。そこまでされちゃこつちはいつて言うしかないじゃない

「！ありがとう！」

ヘステイアとヘファイストスが会話をしていると、そこに2人の神が近づいてきた
「なんや、ドチビやないか、よくここに来れたなあ。そんな服で」

綺麗な赤いドレスを着た、女神?のロキだ

「あらあら、久しぶりねへステイア」

そして、白いドレスを着た女神、フレイヤだ

「なんだ、誰かと思えば、無乳と名高いロキじゃないかあ、よくここに来れたね?そんな胸で」

因みにロキとへステイアはかなり、いや、めちゃくちゃ仲が悪い。それこそ出会えばそく喧嘩が起きるくらい。でも

「う、うわーん!覚えてろよ!・ドチビー!!」

そう言つて、走り去つて行く、ロキ。いつもロキは負けるのだ:胸の話で

そして、なんだかんだ、話し込んでるうちにとうとう目玉の二つ名決めにいつたようだ

「それでは!カオスファミリアのLV8!ヴァンピィの二つ名の案を出したまえ!」

「金髪幼女!」

「ゴールデンアイドル!」

まあ、神々の悪ふざけでまともな二つ名が出ないんだが

「…おい」

「!!!!!!」

神々が案を出していくと、突如後ろから1人の神が声を出した、それだけで、会場は

一気に静まりかえった

「うちの子に変な名をつけたら…わかつてんだろうな？」

「「「「さ、 サーイエツサー!!!」」」

まあ、みなさんお気付きの通り、1人の神とはカオスのことである。そして、まともな二つ名決めが始まつた、そしてでた案は

「それでは！ヴァンピイの二つ名を闇^{ノツテ}夜^{セントア・ルーナ}姫^{ルーナ}で異論はないな？…それでは！もう一つの目玉のレティシアの二つ名決めを始める！さあ！案を出したまえ！」

「ん~…」

「おい、 どうだ？」

「駄目だ、 全く思いつかん」

「あ、 騎士^{ショーガアリエブリーンセス}姫なんてのは？」

「どうしてだ？」

「いやな、うちの子がレティシアさんに助けられたことがあるんだよ。で、そん時の姿が英雄譚に出てくる騎士に見えたそうなんだよ。武器は槍で、軽装だが、その背中がすごく大きく見えたそうなんだ、おかげでそいつはレティシアさんを目標に日々槍を振るつてるがな」

シユヴアリエブリンセス
デナトウス

「なるほど、：それでは！レティシアの二つ名を騎士姫で異論はないな!?」

「――「おう!!」――」

そして、ヴァンピイとレティシアの二つ名が決まつたところで、今回の神会の大目玉の二つ名決めに入った

「それでは！最後の大目玉！カオスファミリア団長のシンの二つ名を決めるとしよう！」

「――「おおおおおおおお!!!」――」

「さあ！案を出したまえ！」

そして、数分後、神々は頭を悩ませていた

「駄目だ、わからん」

「シンの強さが全くもつて不明だからな」

そう、シンの実力を知らないのだ神々は、ただ分かつてているのがシンが龍を召喚しL

▼2冒険者相手でも難なく倒せるということくらいなのだ

「そう言えば、シンつてギルドでも情報が一切ないんだよな？」

「ああ、何が言いたい？」

「つまり、シンはギルドでも機密情報クラスの強さつて事なんじやないか？」

「…もし、それがそうだった場合、あの猛者以上に強いということだぞ？」

「そななんだよなあ」

頭を悩ませていると口キがある情報を言い出した

「そないや、うちの子から聞いたんやけど、シンはベートにすら勝つとるで、赤子を相手するかのよう難なく倒されたんやけど、それにあの龍やが、80階層クラスの魔物らしいで」

それを聞いた神々は驚いた

「あの凶狼ヴァナルガンドでも歯が立たないのかよ」

「まじかよ…」

「まつたくわかなくなつてきたぞ」

神々がシンの二つ名で頭を悩ませていると

「……絶対王」

「どういうことだ？」

「いや、今までの情報を纏めるなら、シンはオツタル以上に強い可能性があるつてことだろ？じゃあオツタルの猛者以上にインパクトのある名前を考えていたらそれが浮かん

だんだよ」

「絶対王か、絶対に勝つ、又は絶対強者ということか」

「ああ」

その神の案を出すと納得したかのように次々と神々が頷いていく、まあ、それが合っているのだが、それを聞いたカオスは

「（絶対王か、これはまたどうして、ここまで、ヴァンペイとレティシアとシンに合つた二つ名が出るのやら。全くこんな風に眞面目に二つ名を決めてくれれば良いものを）」

満足したかのように笑顔を浮かべていた
アブソリュート

「それでは！シンの二つ名は！絶対王で、異論はないな！？…それでは！只今を持つて一つ名決めを終了する！」

そして、3人の二つ名が決まり、終了した、そして神々はある者は不敵に微笑み、またある者は頭を抱え、またある者は興味深そうに見て、またある者は満足した顔を浮かべていた

シンの二つ名：絶対王
ヴァンピイの二つ名：闇夜姫
レティシアの二つ名が：騎士姫

『とある別の世界』

ある世界の迷宮と呼ばれる奥深くに幽閉されている吸血鬼がいた
体をキューブ状の物にほとんど埋まつており動くことができず、何百年とここに囚わ
れていた

そして、突如黒い渦が現れた、その吸血鬼もろともキューブ状の物は黒い渦に吸い込
まれていき吸血鬼は反応できても体が動くことが出来ないので、抵抗することもできず
渦に飲み込まれていった

そして、そこには以上を感じたのか、下から現れたサソリ型の魔物が現れたが敵影
がないのでただ咆哮をあげることしかできなかつた

「キシャアアアアアア
!!!!」

ほのぼの

『カオスファミリアの庭園』

「ふう…偶にはのんびり日向ぼっこも良いもんだなあ…」

俺ことシンは今カオスファミリアの9階から外に出るとある庭園で日向ぼっこをしていた、近くには噴水、花壇、風に吹かれて自然の音をだしてくれる木、レティシア、ヴァンピィ、リリ、白がいる

「そうだねえ。ヴァンピィちゃん達は本当は長く陽に当たると行けないけど、主がこの…えっと…なんだつけ?」

「真祖の翼だよ。ヴァンピィ」

そう、本来はあまり陽に当たるといけないんだが、俺が蝙蝠の翼を模したネックレス【真祖の翼】を渡したから吸血鬼本来の弱点はなくなつた……とことんチートだな。それを作る俺もヴァンピィ達も

「そう言えば、俺たちの二つ名も決まつたらしいな」

「うん、ヴァンピィちゃんは結構気に入つてるよ」

「私も、ここでも騎士と呼ばれるとは思わなかつたけど」

案外、好評のようだ、そう言えば今現在の俺の状況だが、右腕にヴァンピイがくついて、左腕にリリが寝ており、お腹の上に白がスヤスヤと寝ており、レティシアが俺に膝枕をしてくれてる状況だ……正直熱い、そしてこんな美少女達に囲まれて俺は冷静でいる。慣れって怖いもんだな

「だな、俺も何故か絶対王なんて名前が付くもんだからなあ。俺の階級も絶対神だからなんか運命感じちまうな」

上空を飛んでいる龍達を見ながら俺はそう言つた

「そう言えば『主人、最近ある冒険者を指導しているようじゃないか』

「ああ、ベルのことか、なんかほつとけなくてな。それに彼奴は強くなるぞ、若いからまだ可能性は無限にある。どこまで強くなるかは彼奴の意思と目指すモノしだいだがな」それに、ベルはどうやらこの世界の主人公ポジらしいからな。ルシファーカーから聞いただけだが、そう考えていると此方に近づく気配があつた

「シン様〜」

どうやら、ラファエルのようだ、あの子は俺がこの前行つた霊樹や魔力を豊富に含んだ湖に基づきいるのだが

「どうした？」

「あの湖に名前があつたんですよ〜」

ん？どういうことだ、確かあの湖に名前なんぞ無かつたはずだが

「名前？そんなのあつたか？」

「なんでも最近、エルフ達が付けたようですよ。名前が【シンの憩いの湖】って名前のようです」

…………は？

「シンって、真でも神でもなくて…」

「はい、シン様の事ですね」

「…まじかよ、あそこには一回しか行つてないのに俺の名前が付けられるとは

「まあ、わかつた、そのまでいいだろ」

「そうですね。：：ところで私もお昼寝していいですか？」

「ん？別にいいが」

「それでは…」

「どこに寝るんだ？」と思つていたら、まさか白と一緒にお腹の上とは。いやまあ、流石に窮屈だろと思つていたら、ラファエルがみるみる小さくなつていった

「縮小化か」

「はい、こうすれば大丈夫だと思つて」

小さく、いや幼くなつたから声が高く顔も幼い顔立ちになつていて。まあ流石に俺の

身長が190くらいあるから子供2人だつたらなんとかおさまる

「そう言えば、お前達もいつのまにかLv9になつてたしなあ」

そう、昨日ステータスの更新をしたらヴァンピィとレティシアが共にLv9になつていたのだ、まあ最初ステータスを刻んだときほど1000超えかけてたしな。他にも早熟するスキルが2つあるし

「そういえば主、白ちゃんやラファエル達にもステータス刻まないの？」

「うーん、そちらへんは本人の意思だしな。本人達が刻みたいと言ふなら刻むけど」

「私は特にいいですねえ。神の恩恵は確かにいいんですけど、自分でやつたほうが身につきますし、私達自身神によつて創られて いますから元々それに近いのが付いてますし」

そう言つてラファエルは自分の肩にある6翼の模様を見せた

「なるほど…白は…俺からするとあまり戦闘には出て欲しくないな」

俺は白の頭を撫でながらそう呟いた

「白は戦略戦が得意なんだろうな。計算が早いから相手の行動を予測したり頭脳戦などでも白の右に出るのも少ないだろからな…百合子は…あれ以上強くしたらチートじゃなくてバグになりそうだな」

百合子にはベクトル変化という全ての物体にある向きというもの自在に変化させ

ることができる。だから百合子はダンジョンに潜つても魔物の攻撃は弾いたりずらしたりするし、ダンジョンの壁などを使って魔物を潰したり罠に嵌ることができ。更に触れば血流の向きを変えることもできるし、大気を圧縮して雷を放つこともできる

「アルクエイドとフランは：正直あれ以上強くしてどうする？」

「「そうだね」」

フランはなんでも壊す、つまり相手さえも壊すというより殺すことができる。アルクエイドは身体能力は流石真祖というべきほどのパワースピードタフさ、更にアルクエイドはダンジョン内ではあまり使用できないが月落としという避けることも壊すことも並大抵の者では不可能なことをしてくる

「ま、俺たちのファミリアは争いが嫌いなのが多いからな。今すぐに強くなりたいと言う子はいないだろ」

「そういえばシン様、リリちゃんも最近どんどん強くなつていつてますね」

そう、リリも着々と強くなつていつてるヴァンパイ達と一緒に更新したらLV4になつていた、ギルド側も『あ、カオスファミリアなのか、なら仕方ないな』といった感じでリリが最速でLVが上がつても諦めた感じのようだつた、次の神会でリリの二つ名がなんになるのか気になるが、その時を待とう

「そうだな。それにあんなでかいバッグを担ぎながらハンマーを振るうのは無理そうだ

から俺が「マジックバッグ」を渡したからな」

マジックバッグは腰に付けて、邪魔にならないくらい小さいけど、見た目に合わないくらい物が入る

「おかげでリリがあるので体でつかいハンマーを振り回すから他の冒険者がいない時しか戦えないけどね」

レティシアが苦笑しながら話す

「そうか」

…にしても、偶にはこんな風にのんびりするのもいいもんだな

「平和だなあ。さて俺も白達と一緒に寝るか」

「夕飯ができる時間になつたら起こすよ」

「ああ、ありがとうなレティシア。足、大丈夫か?」

「大丈夫さ、今ご主人と一緒にいられるというだけで幸せだからこれくらいへっちゃらさ」

ほんと、俺には勿体無いくらいの子が眷属で良かつたと思うよ

「そうか…おやすみ」

「ああ、おやすみなさいご主人」

レティシアが俺の頭を撫でながらそう言つてきた

歯車は回り出す

そう言えば俺は大事な事を忘れていた、ということです俺は夕食が終わって、いつも通りメイド達に労いの言葉をかけて玉座に向かつた

「なあ、カオス」

「ん？」

「俺って神だよな？ そんでもつて世界、星、宇宙の神だよな？」

そう、俺はカオスからこの3つを司る神と言われたが、何もしてないのだ、破壊神とか創造神とかならまだわかりやすくていが、この3つは何をすればいいのか全くもつて検討がつかん

「ああ、その事なんだが」

「ん？」

「ほとんどやる事がないに等しいんだわこれが」

「は？」

「は？」

「いや、そんな顔されてもな？ 神つてのは生まれた時から自分が何を司っているのか、何

をすればいいのかつてのがわかるんだ、でもお前は異例中の異例で俺たちが生み出したけど何を司らせるのを決める筈だつたんだでも決める前に下界に落ちて、そこから年月が経つたから、お前の魂が真っ白だつたけどなんとか間に合つて今まで誰もそれを司ることのできなかつた世界と星の2つをお前が司ることになつたんだ、世界はアメが司つてゐるからな。それに現にお前は神と自覚してもやる事がわからなかつただろ?」

確かにそうだ、俺はカオスから2つを司つてゐるという事を聞いた時、いやそれよりもつと前、俺という俺が目覚めた時でさえやる事がさつきの話を聞いても全く記憶にない:

「その2つは誰も司ることのできない代物だつたんだよ」

「…どういうことだ?」

それはつまり、誰も司つたことのない、力を俺は持つてゐるという事か? 誰もその力を知らない、るべき事を知らない、その2つは未知数で誰も知らないからこそ: それじやあまるであいつが言つてた

「力が強大すぎたからだよ」

⋮誰かが言つてたな。いや、あいつか十六夜が言つてたな。力が強大過ぎると孤独に

退屈に寂しかつたとでもあいつは

『だからさ俺、力が強大すぎたからいつも周りから避けられてたんだよな。いつも俺に向けられる視線は恐怖、怒り、不審、化物、こんなもんばつかだつた……でもさ俺は、お陰でお前に会えたって思うんだぜ、お前俺のこの力を見ても、驚きはしたけど恐怖しながらつたしな。

初めてだつたんだぜ、恐怖じやなくてあんな顔と目はまるで小さい子供がテレビでヒーローとかを見た時に出る、純粹な凄いっていう感じはさ、そつからだつたよなお前が何故か自分を鍛え始めたのはそつからは驚きの連発だつたぜ、俺並とはいかないがそれでも人間を辞めていきやがつよな。

俺は全力を出さなかつたけどそれでもお前は俺と同じ土俵に登つて来やがつた、俺みたいなまるでナニカから渡されたような力じやなくて努力と才能のみで、もしかしたらそれに裏があるかもしれないが、それ抜きにしてもお前は努力と才能だけで登つて来やがつた、勉学も運動神経も力も。そしてお前は俺の横に立つてくれた、いつも俺の隣に居てくれた、俺が友達がいなかつたからどつからか連れてきたあいつらを連れてきたよな。

あいつらもなんか変な力を持つてたな。一見平凡だけど右腕が妙な力を感じるいつも不幸や奴や、肩にいつも黄色い鼠、確かピカツて感じでいつも鳴いていたな。しかも

そいつその鼠が言つてる事を理解してるみたいな感じだつたしな。他にも白い軍服を着た20代前半の男、提督とでも呼んでくれつて言つてたな。そいつは体のどこかに何体? 何人? まあそんな感じの妖精とかいう摩訶不思議生物を連れてたり色々な奴を何処からともなく連れて来ていたよな。

しかも俺のことや力を見てもそいつら「まじかよ! Level 5位はあるんじやないか?」や「……俺のポケモン達の方が強い」だつたり「新手の艦娘、いや男だから艦息か? いやでも物理だし、でも長門も殴つたりしてし……」だつたりわけわからんねえことばつか言つてたがあいつらはお前と同じように俺に気さくに話しかけてきてくれたよな。本当お前達といふると飽きなねえな。だからさお前達には感謝してるぜ、特にシン! お前には返しても返しきれない恩がある。なにか困つた事があつたら言つてくれよ! ヤハハハハハ!! ……だからさ、これからもよろしく頼むぜ、親友! 勿論お前らもな』

『『『当たり前だ、俺たちは一生腐れ縁だからな!』』』

懐かしいな。またあいつらに会いたいが、死んだ俺が会いに行つたら混乱が起きる。いや、人体解剖ならぬ神体解剖される可能性もあるしな。俺だけならまだいいが、あいつらに迷惑をかけるわけにはいかないからな。そういうえばあいつらは一体何処から来るんだ? 気づいたら俺の家の中だつたり、家の裏にある小山の中にある寂れたでも不思

議と心地いい感じのする神社にポツーンと突つ立つてゐるし、今思うとあれが神力と呼ばれるモノだつたんだな。通りで懐かしい感じや落ち着く感じがしたわけだ、まあそのあとといつらは「『やべえ、御坂 or ナツメ or 大淀に怒られちまう。またなー』」つて口数の少ないレツドでさえいつも口を揃えて言い神社に走つていつて、鳥居をくぐると風が吹いてから氣づくといなくなつてゐるからな。あれは一体どうなつてゐるんだろうか、なんの神がそこに祀られてゐるのか気になるな。そう言えば白夜ちゃんやその義兄の夢蝶は元気にやつてゐるだろうか、今度ケーキを作つて待つて言つときながら俺死んじやつたしな。白夜ちゃんが高校入学祝いとして色々作つてたのに。夢蝶は一応社会人でとある大手企業の企画をいくつも立ち上げ今ではテレビに多く出演している。けど、いつも白夜ちゃんをからかつてたなそれでも仲は良さうだつたけど：偶にSになる

「……おい！」
「は！」

どうやら物思いに耽つてゐるとカオスが心配してゐたようだ
「すまん。昔を思い出してた」
「そうか、それで…その…」

……ん？ 珍しいな力オスが口ごもるなんて

「なんだ？」

「……よし、……やっぱ嫌だつたか？ いきなりこんなモノを司つてしまつて」

「ああ、そうか、心配させちゃつたか、俺が多分暗い顔をしてたんだろう。これじや親不孝者だな

「いや、大丈夫さ、強大な力だけどその分あの子達を守れる力があるんだ、また助けるさ！」

「……そうか、なら良かつた、さて今日はもう遅い、そろそろ寝たらどうだ？」

「気づくと体感的には10時を回つた辺りか、結構、話し込んでたな

「そうだな。おやすみ力オス」

「ああ、おやすみシン」

◆？ ◆？ ◆？

部屋を出ていつたシンを見送つて力オスは心配していた『また、助けるさ』シンが力オスにそう言つた、つまり十六夜の時と同じように自分を犠牲にして助けるんじやないかと思わずにはいられなかつたからだ

カオスは祈らずにはいられなかつた
シンやあの子達に幸せが続きますように

シンの世界、新名【ゼラグニア】の夜空には1つの星が流れていつた

◆? ◆? ◆?

ゼラグニアにある【シンの憩いの湖】と命名された湖の滝の裏に隠れるようにしてある洞窟の奥深くに、輝く金色の髪であつたであろう、今は鈍い色をした髪を揺らしながら、まだ肉体は幼い少女は、見たことのない場所で混乱しながらも、すすり泣き

「…けて……だれ…か……たす……けてよ…」

動けない体で滝の音を聞きながら、今も助けを待つていた、自分を助け出してくれる者を、自分を認めてくれる者を、自分を求めて、愛してくれる者を、彼女は温かさを求めていた、冷たいキューブ状の冷たい感触ではなく、包み込んでくれる優しい温かさを

彼女は知らない

もうすぐ来る男を

彼女は知らない

自分を助け出してくれる男を

彼女は知らない

今まで感じたことのない安心感と温かさを

彼女は知らない

地獄から助け出してくれる男を

彼女は知らない

その男が自身の依代とする為に動いていたあの神と同じ、その者も神であるというこ
とを

彼女はまだ知らない

運命というものを

◆? ◆? ◆?

彼女を救う男は時を同じくして、自分の力の恐怖を異常性を強大さを克服していた、
心には「十六夜にできたなら俺もできるはずだ、俺は孤独じやないから、あいつらがい
るから」

全くもつて異常である。真の姿が神であつた者と常人とはかけ離れた力を持つ人達、
持つていなかつた者達の友情、それは離れていても繋がつていた

そして時を同じくして、箱庭に呼ばれる場所に男と女2人に猫1匹が呼ばれた、歯車
は回り出す、1つまた1つとハマつて大きな物へと変わっていく、それが行き着く先は

破滅は栄光か、その力ギを握るのは神と関わり大なり小なり神力を得た、未来を担う者達である。

舞台は【ゼラグニア】その世界は全ての世界の始まり、ありとあらゆる世界は【ゼラグニア】を元にして造られた世界、この世界が何者かの手に渡るとその者が【ゼラグニア】を元にして造られた数多の世界を手に入れたということになる。

更に言うと、カオスがシンに渡した鍵はその世界、【ゼラグニア】の所有者を表す。カオスは新たに出来た世界だと言つたが、本当は違う。その世界はカオスたち原初の神々が生まれたと同時に生まれた世界なのだ、神々は様々な者がいた欲に溺れ、「ゼラグニア」で生まれた生き物たち、ましてやその世界を自分の者だと主張する者は少なくなかつた、結局はカオス筆頭の維持派、その世界は俺の者と主張する者たち、カオスが最も嫌う男、ドード筆頭の過激派で対立し、長きに渡る激闘の末、過激派達は負けその世界から追放した

そしてカオス達は生まれた生命達を手助けしながら神々、人々、生物と共にその世界を繁栄させていった、だがカオス達はいつまでも自分たちが手助けをしていると人々は怠けるんじやないか、いずれ自分たちがいないと何も出来なくなるんじやないか?と思ひゼラグニアに住む全ての生物達からこの世界を離れる事を伝えた、勿論、人々も生物達も悲しんだ、だがカオスたちが離れる理由を聞き、確かにそうなるかも知れないと思

い。泣きながらも納得した、そしてカオスたちはその世界を離れた、何柱かの神を残しカオス達は世界を創つていった、ゼラグニアに残された人々は立ち上がり種族は違うが共に手を取り合いその世界をより豊かにしていった

そして何万年もの月日が流れた、もともと残つていた神々は今もなおゼラグニアに住む者達を我が子を愛する慈愛の目で人々を見ながらいつか来るかも知れない侵略者達が来ないか細心の注意を払いながら今も見守つている。これがゼラグニアの真実である。そして人々がシンを認識したのは人々は何万年も経つた今もカオス達を自分たちの生みの親を忘れてはいなかつた、勿論人々は神からすると寿命は短く今を生きるのはその者達の子孫であるだが、魂に刻まれたカオス達を忘れてはいなかつた、カオスは何万年ぶりにゼラグニアに降り人々にシンの事を教えた、だが姿は表さない。気づいたらシンというカオス様達の子がこの世界の神の中の神、神王として君臨していたという事になつていて。人々は違和感は感じない。寧ろ今もなお見守つていての事から感謝をしている。当然その事はシンは知らない。カオスは人々話そうとはしているが、タイミングが見つからないのだ

◆？◆？◆？

【転生の間】

ここは転生の間、死んで偉業、又は多くの命を救つたり、不幸な人生を歩んだり、また友、家族、恋人などに出会わせる為だつたり色々な事情を持つて不幸にも死んだり、死なせるのが惜しい者達を転生させる場所

そこに義兄妹が招かれた

2人はシンが死んだということは知らされておらず、いつもの様に兄が運転する車に乗りシンの家に向かつていて、そこで悲劇は起きた、信号が青になりアクセルを踏んで進むと横から大型トラックが突つ込んで来た、居眠り運転だった、もちろん普通の車と大型トラックが衝突したら車の方が圧倒的に被害が大きい、2人とも右側に座つており、トラックは右から来たのだ、死を覚悟した2人は衝突音がして……痛みは感じなかつた、2人とも恐る恐る目を開けてみると、そこには和服に金髪の美女が立つていた、そして告げられたのは

「あなた方は残念な事にお亡くなりになられました」

そう告げられた時、妹は泣いてしまつたが兄は驚きはすれど泣きも怒りも不信感も抱いていない。今は妹をあやす事にしているようだ

「俺たちはどうなるんですか?」

「あなた方には転生する権利が与えられました」

もちろん、そんな権利などない。金髪の美女とは「ゼラグニア」の光と愛の女神アイ

リシア。そしてなぜこの兄妹が選ばれたのか：不幸だつたから？否、可愛そ�だつたら？否、この兄妹はある力を持つていた、普通に生活していられないであろう力、それは神力、神々が持つ世界を自然を操る力、それを何故兄妹が持つてゐるか？答えは兄妹が関わつた者達の中にいる

「転生？……次小説とかにある？」

「はい、ですがあなた方が転生する場所は魔物やダンジョンと呼ばれるものがあり、今のあなた方ではすぐに亡くなつてしまふでしよう。ですので得点を授けることになります」

「特典？それは一体どんな…？」

リーン、ゴーン、リーン、ゴーン

その時、何もない白い空間なのに鐘の音が鳴つた

「い、一体何が！？」

「うう、お兄ちゃん」

兄は鐘の音が鳴ると妹を抱き寄せ辺りを警戒し妹は怯えていた、女神アイリシアは「ふふ、驚かせてしまい申し訳ありません。どうやら時間のようなのであなた方にはもう行つてもらいます」

「ま、まつてくれ！」

兄はアイリシアが去ろうとしたので慌てて呼び止める

「はい、どうしたのですか？」

「あなたの名前を」

聞く人が違えば、ただのナンパにしか見えないが、この兄はそのつもりは一切ない。いや10人中20人が振り返る美しさを持つた女神相手にそのつもりが一切ないとか男として終わっているんじやないかと思うが、一応彼はアイリシアの事を美しいと思つてるので大丈夫である

「そう言えば名乗つていませんでしたね。私は女神アイリシア。あなた方が転生する世

界の光と愛を司る女神です」

「女神様でしたか、ありがとうございます」

彼はアイリシアに頭を下げた

「ふふ、気軽にアイちゃんと呼んで下さい。みんなからはそう呼ばれるので」

「この女神なかなかに軽い。アイリシアを信仰している聖皇国が聞いたら卒倒ものだ

が

「いえ、流石にそれは」

兄がそう言つていると

「ありがとう、アイちゃん！」

後ろから妹がお礼を言つた、アイちゃん呼びで、兄は口が開いていた、ここに友人達がいたら必ず写真を撮つて後でからかうであろう顔をしている

「ふふ、それでは良い異世界ライフを。私たちはあなた達を歓迎します」

そう言うと、兄妹は眠くなつていき、目を閉じた

「…ふふ、初めて人の子からアイちゃん呼びされちゃつた、メイちゃんに伝えなきや……
頑張つてね。夢蝶くん、白夜ちゃん」

弟子二人目そして、歓迎しよう

『オラリオ城壁』

オラリオの城壁にて、ナイフと刀がぶつかり合う甲高い金属音がまだ日が出てない中に響いていた

「はあ！」

白髪赤眼の兎を連想させる冒険者。ベル・クラネルが稽古を頼んだ相手、『絶対王』シンに向けてナイフを振りかぶる

「もつと、腰を低く構えろ。ナイフで戦うなら素早さが求められる。腰を低く構えてそこから足の筋肉を使いバネのように動けば初見で躲せる者は少なくなる」

「はい！…はあ!!」

ベルの稽古はこれで大分経つ。そしてベルは目に見えるほど強くなつていつている。それに：

「よし、休憩だ」

「はあはあはあ…ふう。どうでした？シンさん」

「まあ、いい線いつてるさ、だんだん強くなつてきてている」

「本当ですか?!」

「ああ」

「よかつた！」

さて、少し気になつてゐる事を聞くか、プライバシーに欠けるが

「なあベル」

「はい？」

「お前さ……成長を促進させるスキルが顕現したんじやないか？」

「ツ!!」

当たりか

「いや、別に言いふらしたりする気はないさ。ただなそんなスキルが顕現したんならお前も精神的にストレスを抱えるんじやないかとな」

「……気づいていたんですね」

「まあな。お前の成長速度が余りにも早いからな」

「はい。神様には誰にも言うなと言われましたけど、シンさんなら信頼できます」

「嬉しいこと言つてくれるじやない」

「あはは。最初は神様も隠そうとしたんですけど、紙に書かれたステータス欄に無理矢理消したような跡があつたので、詰め寄つたら教えてくれました」

「ま、そりやそうだわな。そんなスキル娯楽に飢えた神達からすると是が非でも欲しいしあわよくばそのスキルの発現方法を教えて貰つて、自分の眷属に発現させるようになるわな」

まあ話を聞く限りじやベルの主神はいい神っぽいから安心だな

「はい。神様もそれを考えて僕に口止めをしました、でもシンさんなら信頼してますので大丈夫かなあと、アハハ」

頬を少し染めて照れ臭そうに頭を搔くベル……こいつ本当は性別女でしたつてことはないよな？……ないよな？

「そうか……ん？」

妙だな。こんな朝早くからここに来る人がいるとは。ま、気配からするとあの娘のようだが、なんの為にここに来るんだ？

「どうしました？」

「いやなに、珍しい客だなど」

「え？」

その時、城壁の階段から風を浴びて綺麗な金髪を揺らしながら城壁の上に来た女：

『剣姫』アイズ・ヴァレンシュタインが上がつて來た

「え？え？なんでここにヴァレンシュタインさんが？」

ベルが困惑しているとアイズはこつちに近寄ってきた、相変わらずの無表情だこつて、若干頬が赤いがたぶん朝日の光を浴びてそう見えるだけだろう。うん

「おはよう。アイズ」

「うん。おはようシン」

ん？ はて？ いつから俺たちは呼び捨てで会話するようになったんだ？……考えても無駄か

「おはようござります。ヴァレンシュタインさん」

「…えっと、誰？」

可愛らしく首をコテンと傾けながらベルに言う。天然だな今までの仕草を考えると、もう一度、天然だ（確信）

「あ、そうでしたね。自己紹介を。僕はベル・クラネルと言います。まだまだ初心者の冒険者ですが、ヴァレンシュタインさんの事は耳に挟んでいます」

「ベル：ベル。可愛い名前。顔も」

お？ 逆ナンかな？ いいぞもつとやれ。からかい甲斐のある。夢蝶がいないから、からかい欲求という俺と十六夜だけの欲求なんだが、最近はいじる相手がいないからな：お？ 案の定、顔を赤くしてやがるベルの奴、スマホないかな？ 写真撮つて後でからかう。え？ ない？ なら脳内保存するまでよ

「え?! いやいやいやー・ヴァレンシュタインさん!?

「アイズ」

「え?」

「アイズって呼んで」

「え? でも…」

「もう」

「あ、はい、えっと…アイズ…さん」
ぞ
アイズが頬を膨らませやがつた、天然つて恐ろしい、そこらの男だつたらイチコロだ

「…うん。よろしくベル」

仲良き事は良き事かな

「それで、アイズは一体どうしてここに来たんだ?」

「あ、シン」

「ん?」

「私の事も鍛えてくれないかな?」

なるほど、そういう事か

「どうしてだ?」

「私は強くなりたい、でもだんだんステータスあまり伸びなくなつてきて、だからシンに頼めば強くなるんじやないかと思つて」

強くなりたいねえ。そういうえばアイズつて誰かに似てるんだよなあ。誰だつけ？……ああ、喉まで出かかるつてるんだけどなあ。わからん、出会つた人？達が多すぎてわからん。後で【絶対記憶】つてスキルかサポートしてくれる系のスキルを造るか

「なるほどね。ま、そういう事なら別にいいが、前に聞いた、質問の答えは出たか？」

そう、俺は前に豊饒の女主人にてアイズに質問をした

「それは……わからない。目指すものとやるべき事はわかる。でもそれが本当にそうなのか、私が望んでいる事なのかわからない、わからなく……なつてきた」

……フツ

「上出来だ」

「え？」

ベルまで驚きやがつたが無視だ無視

「それでいいんだよ。お前はまるで何かに囚われてるような感じだつた、絶対にやらなくちやいけないこの命に代えてでもみみたいな感じでな。でも今のお前はその呪縛から逃れようとしている。するべき事はわかつた、でもそれが自分を犠牲にしてまでやらなくちやいけないかと聞かれれば俺はNOと答える。お前が死んで悲しむ奴は沢山いる。

お前のファミリアの奴らは特にな

「悲しむ？」

「ああ、悲しむ。ファミリアってのは家族つて意味だ、家族が死んで悲しまない奴なんているか？いないだろ」

「家族…」

「暗い顔をしたな。なるほど大方、家族、両親が死んだからこんなになつたのか、小さい時はよく笑っていたんだろうな。少しづつ少しづつ、アイズに笑顔を取り戻さなくちゃな。俺の周りの奴らが暗くなるのはNGだ、え？死んで悲しませたお前が言うな？今生きてますが、何か？」

「お前が家族に対して何かしらの感情を持つてているのはわかつた、今はまだ無理でもいつか必ずお前を思つてくれる人お前が思う相手が現れる筈だ、その時までいや、その後も絶対に死ぬな。いいな？」

アイズに近寄つて迫ると、アイズは

「う、うん。わかつた」

ええい！俺が近寄つただけで頬を染めて恥ずかしがるな。生娘かお前は！

「と、すまんな。嫌なことを思い出させただろうに」

「ううん。大丈夫、さつきの質問の答えは出たから」

「お、 そうか、 それは良かった」

「そういえば、 シンのファミリアつてどこにあるの？」

「ああ、 そうか、 僕のファミリアは別世界にあるからな。 一応門に入らず外から見ると
ちよつとでかい屋敷のようなものが見えるだけだしな。 にしてもうーん、 いいのか？ こ
いつらに教えて、 ベルは兎も角、 アイズはぽろつと話してしまったからなあ。 ……」

まあいいか

「ま、 そうだな。 この稽古が終わつたら教えてやるよ」

「うん」

「シンさんのファミリアかあ、 どんな人がいるんだろう」

「……あ、 やべ、 ファミリアの団員、 全員女だ、 何処と無く危険な感じがする。 主にア

イズ関連で……」

「ほんじややるぞ、 ベルはそこで反復横跳びをやってろ」

「わかりました」

「さて、 アイズ武器を取れ、 軽く打ち合うぞ」

「わかった」

「そして、 アイズは腰に差していた剣『デスペレート』を抜き、 構えた

「それじゃあ、 行くよ！」

「おう、来な！」

俺はいつから戦闘狂になつたんだ？ 楽しくて仕方ない

「はあ、はあ、はあ」

アイズは大量に汗をかき、膝をついていた、結局アイズは俺に一撃も与えることなく、全部受け流され、1時間ほどその戦闘が繰り広げられた、ベルは途中から危ないと感じ下がつていた、そしてポカーンと見ていて、『僕、あんな風になれる気がしないよ』と言つていた、当たり前だアイズは兎も角、俺にたどり着きたいなら1000億年早い！

「さて、それじゃ今日の稽古は終わりだ、ベル、帰るぞ」「はい！」

「はあ、はあ」

問題はアイズなんだよなあ。軽くと言つたのに全力でくるから、立つのもやつとつて感じじやないか？仕方ない

「ほれ」

「え？」

俺はしやがんでアイズに背を向けるようにしていた

「立つのもやつとつてくらい、疲れたら？ならおぶつて行くから乗りな」

「……う、うん。あ、でも私、汗かいたから臭いかも」

「んなこと気にすんな。それにお前は臭くないぞ、いい匂いするしな」

「／＼

たぶん顔を赤くしながらアイズは背に乗つてきた

「…シンさんつてたらしですか？」

失礼な。俺はたらしじやない……ないよな？

さて、着いたわけなんだけど

「うわあ、大きな屋敷だね！」

何故お前がいるんだ？・ティオナよ

「え？ だつて見かけたから着いて来たの」

「さいですか、それじゃ門を開けるぞ」

俺が門に触れると門に青いラインが広がり、門が開いていく、そして俺が足を踏み入
れると、俺の姿が消えた

「「「え！」」」

「ハハハ、驚いたか、お前達もさつさと来な。忘れられない景色を見せてやるよ」

俺は声だけしかアイズ達には聞こえてないだろうが、まずはベルがそしてアイズがそ
して最後にティアナが入った、そして門が閉じた

「え？ ……うわああ

「ここ、は？」

「すごいいすごい！ ……こんな景色が見られるなんて！」

アイズ達はいくつもの島が浮かび、その真ん中に城があり、周りには麒麟や小型の龍、

そして獣たち、妖精やなどの地上から来たもの達、空にはグリフォンやドラゴン、1つの島にある湖には大きな魚から小さな魚達が跳ねていた
「ようこそ、俺たちのファミリア、カオスファミリアへ。歓迎しよう。さあこつちだ、来な」

そして、俺たちは島々に架けられた橋を渡つて城に向かつていった

カオスファミリア達と朝食

『アイズ視点』

ここは…いつたい？

私はシンのファミリアに来て、門の先にある大きな屋敷がファミリアのホームだと思っていたらシンが門に触れたら青い模様が浮かび上がって、足を踏み入れたらまるで別世界に来たかのような景色が広がつていて……シンが笑顔で

『ようこそ。俺たちのファミリア、カオスファミリアへ』

つて……つまり、あの城がシンのホーム？それに私たちの周りを走つたり飛んで騒いでるドラゴンや羽が生えた小人……

『ねえねえこの人たち誰かな？』

『わかんない』

『ねえ。こっちの人、兎みたいだよ』

『ほんとだ。赤い目に白い髪で兎みたい』

『それよりさう。この金髪の人、精霊の気配がするよ』

『あ、確かに。気配的には風の精霊かな？』

『たぶん…』

色々と喋っているけど……ティアナ達には聞こえないのかな？ 反応しないし……よ
し

「ねえちよつといい？」

『わ！……この人、私たちの声が聞こえてるのかな？』

「うん」

『わ～、珍しい。私たちの声が聞こえるのってエルフや、魔力が高い人とかなんだけど、
君はどっちかな？』

「たぶん…後者」

『そつか～…あ、それで、何かな？』

「えつと、ここつて一体どこ？」

『ん？……あ！もしかしてシン様に連れてこられたの？』

「うん」

『それなら納得。ここは《ゼラグニア》っていう世界なんだよ。たぶん君達が来た世界で
いうと、別世界…というのかな？』

別世界？…つまりここは私たちが住んでいる世界とは別の世界っていうこと？

『色々と思うとかはあると思うけど、別に君達を取つて食うつて訳じやないから安心し

て……あ、でもシン様達に危害を加えると上空を飛んでいる龍達や城の中にいる獣達から襲われるから気をつけてね』

『……………あ

『……………ジー

『……………ジー

『……………ジー

e t c

沢山のドラゴンが飛んでいる。中には鳥?みたいな四足歩行の魔物もいる。見ただけでわかる。あの魔物達には私は手も足もでない。たぶんフインやリヴエリア達でも

……

『それじゃあね。私たちはもう行くよ。私たちは基本的に下の湖にいるから』

『……………』

「うん……またね」ノシ

「アイズー！ 置いてくよー！」

ティオナが妖精と話してゐる合間にシン達についていき、アイズは少し遅れていた

「わかった」

……シン……貴方は一体何者なの?

『アイズ視点 out』

そつか、アイズは精霊の血が入つてゐるから妖精と話せるのか、これは完全に俺のミスだな。おそらくアイズは俺がただの人ではないと勘付いているだろうな。

……ま、大丈夫だろう。俺の正体がバレたところで別の世界に居を構えればいいからな……あんましたくないな。それなりにいたからこの世界も愛着が湧いた……ふむ。精霊の血を引くというところがあつたから神の血を引いているとかで通用するかな？

「シーン」

ん？ 考え事をしてたから反応が遅れた、ティオナか：正直何故偶然にも合うのか本当に考えものだ

「どうした？」

「ここが、シンのファミリアのホームなの？」

「ああ」

「大きいねー。うちのホームより大きいんじゃないかな？」

「ロキファミリアには行つたことないからわからんな」

「そうなんだ？ それじゃあさ、今度は私がロキファミリアのホームを紹介するね？」

「……わかった、その時は頼む」

「うん。あ、それとさ門を潜るまえに敷地に大きな屋敷があつたけど、あれはなに?」「それは来客用の屋敷、いわばおとりの様なものさ」

「ふーん」

俺の隣で後ろで手を重ねてご機嫌そうに鼻歌を歌うティオナ。なにがそこまで機嫌を良くするのやら。それにベルは驚きの連続だからか放心状態だ、アイズは俺に何か言いたいが言葉が見つからなって感じだからなあ。アイズは後でゆっくりおはなしをするか

そんなこんなで橋を渡り城門まで来た、これまたいつもの如く門に触れ、模様が浮かび門が開いていく、そして……

「「「「「「おかえりなさいませ」」」」」

メイド達が綺麗に揃えてお辞儀をしながら言葉を発する。最初の頃はむず痒くて慣れなかつたなあ。今じや慣れたが

「「「.....」」」

あ、そっかこいつらは初めてだから驚くか、オラリオじやこんなの無いからなあ
「さて、いらっしゃい。ベル、ティオナ、アイズ、俺のファミリアへようこそ」

俺がアイズ達に言うと、メイドの一人が近づいて来た

「シン様、朝食のご用意が出来ております。そちらのお客様の分もお出ししてよろしい
でしようか？」

「ああ、頼む」

「かしこまりました」

メイドがアイズ達の分の食器を用意する為に8階に転移すると、固まっていたアイズ
達が動き出した

「し、シンさん？こ、これは？」

「ん？うちのメイドたち」

「め、メイドですか？」

「ああ、そうだ、時間もいいから朝食、食べていくか？」

「「「う、うん」」」

「それなら。俺の近くに寄つてくれ、8階まで遠いから転移する
て、転移？」

「一瞬で別の場所まで行く、移動系の魔法さ」

「な、なるほどー」

そして、3人が俺の側に寄つたのを確認すると

『《転移》』

視界が一瞬で切り替わるとそこにはカオスやヴァンピィ、レティシア、その他のメンバーが既に椅子に座つて待つていた

「おう、遅いぞシン……ん？客か？」

「ああ、色々あつて朝食に誘つた」

「そうか、なら座りな君達も。うちのメイド達が作つた料理は美味しいぞ」

「「はい」「」

全員が椅子に座つたのを確認して

「ああ、それと俺たちは食事をする時にある事をするんだ」

「ある事？」

「ああ、食に作つてくれた人に感謝を込めて、手を合わせながらいただきますと言うんだ」

「へえ～」

「それじゃ。手を合わせて」

「「「「「「「 いただきます」」」」」」」

「！美味しい！」

「ほんと…」

「こんな美味しいの初めて食べました」

「それは良かつた、沢山あるからどんどん食べててくれ、朝ごはんは1日の源だからな」

「ねえ主～」

「ん？どうしたヴァンパイイ」

「ヴァンパイイ達の紹介はしなくていいの～？」

「おっと、それもそうだな。3人とも聞いてくれ」

「「？」」

「それじゃあ先ずは俺からだな。俺はカオス。このファミリアの主神だ、最近の趣味は
読書だ、よろしく」

「次はヴァンパイイちゃんね。私はヴァンパイイって言うの。主・シンの眷属だよ」
「「眷属？」」

「君達で言う。神と人の関係みたいなものだよ」

「次は私かな。私はレティシア・ドラクレア。ヴァンピイと同じ、ご主人の眷属だ」「はい、次はリリですね。リリはリリルカ・アーデと言います。ちやんとした小人族ですので安心してください」

「はいはーい！ 次は私ね。私はアルクエイド・ブリュンスタッド。二人と同じ、シンの眷属よ。よろしくね。気軽にアルクって呼んで」

「私はフランドール・スカーレット、フランって呼んで」

「白：です。シンにいの義妹です」

「涼科百合子、よろしく」

「次は私だね。ガブリエルだよ。よろしくね」

「ら、ラファエルです。よろしくお願ひします」

「ウリエルだ、シン様達の護衛をしている」

「私はミカエルよ。今さつき自己紹介をした3人のまとめ役兼このファミリアの情報処理担当よ。それと、私たちは貴方達でいう『天使』という種族よ。よろしくね」

「…最後は私なのね。ルシファー…よろしく」

「「…………」」

「とまあ、驚くとは思うがこれが俺たちのファミリアの団員だ（恩恵刻んでないけど）どうだ？」

「……」チーン

「あ、あはは。シンも規格外だなあと思つていたら団員の殆ども規格外だつたなんて」「うんうん」

……ベルが氣絶しとるがな……それと、やつぱ驚くよなあ。この世界での英雄譚とか物語だけしか出てこない『天使』がいるんだから

「じゃじやあさ、ヴァン・ピイさんやレティシアさん」「さんはいらないよ」……ヴァン・ピイ達がLV8つてこ「この前LV9になつた」…………うん、もう驚かないよ。このファミリアがびっくり箱だつてのは理解したよ。で、話を戻すけど

ティオナ：結構、物分かりがいいな。いや、理解したくないだけか

「ヴァン・ピイ達がそんなにLVが高いんだから他の団員も高いのかな?」

「……うーん、そうだねえ。白やメイド達はそこまで高くないけど、他は第1級冒険者と遜色ない強さだね」

「……うん。そうだよねえ」

「……は！なんか有り得ない事が何回も起きた気がする」

「ところがどつこい！現実です！」

「……ほんと？」

「本当」天使スマイル

「う、うわああああああ!!!!」

「ガブリエル、少しはオガラートに包め」

「ごめんごめん。面白そうだつたからつい」テヘ

「全く…ベルも落ち着け」

「なんで？なんでここに『天使』が？他にも美少女と美女ばっかりだし。…おじいちゃん。ハーレムを築いてる人は既にいたよ」

…ベルのお爺ちゃんは一体なにをどうベルに伝えたんだ？ハーレムとか……いや、俺が周囲の目から見ると築いているから何とも言えないけど

「そういえばベルは英雄譚が好きだつたよな？」

「…あ、は、はいそうです」

「そうか、それなら後でルシフナーについて行くと良い、ルシフナーはこのファミリアにある図書館を管理していて色々な本があるからベルの知らない英雄譚があると思うぞ」「本当ですか！？それならルシフナーさん。連れて行ってください！」

「…わかった」

「あ、アイズさんとティオナさんは後で私たちの所に来てください」

ん？ レティシア？…なんで二人を呼ぶんだ？…なんか、アイズは不思議そうにしてるけど、ティオナは理解してるのかなんか…こう、凄い目をしてる

「わかつた」

「シンにい？後で来ていい？」

「ん？構わんが」

「うん…えへへ」

……そろいえばここ最近、あまり構つてなれなかつたな。依存性は少し緩和されて数日なら離れても大丈夫なくらいになつた、くう、いずれ兄離れをしなくちやないないと
思うと…あ、胃が痛くなつてきた、心臓も…あ

「ティオナ」

「ん？なあに？」

「頬にソース付いてるぞ…どれ、とつてやる」

「あ、い、いいよ」

「遠慮すんな…よし」

「あ、ありがとう」頬染め

「…また、朴念仁と善意が重なつて…はあ、また増えたなあ」「…ため息

「…？」

恋人とおまけ

「…………」馳走様でした」

なんやんかや朝食を食べ終えた俺たち

「それで、君たちはこの後どうするんだ？」

俺がそう聞くとベルとティオナはルシファーについていき図書館に行くそうだ、アイズは俺と行動したいらしい。これはあれですね……バレたから聞かれるな

◆◆◆?

俺たちは浮島の一つの湖がある島に来た、ここはよく色んな生物がいるからな。基本的に水を飲みにくるやつだつたり、湖の中にいる魚……魚?……みたいなものを食べにくるやつ、休息しているものだつたり様々だ

「…………」

……うむ、どちらも無言。さて、どうしたものか、こちらから話しかけてもいいが

……俺がそう悩んでいると、アイズから話しかけてきた

「ねえ、シン」

「……なんだ?」

俺のことをジツと見つめるアイズ、まるで俺の中を覗こうとしているように見える

「シンは…何者?」

ビュオオオオオと、一つの風が俺たちを駆け抜けた

「……それは、どういう意味でだ?」

「シンは一体何者なのかなつて、ここに来た時にいた羽の生えた、小さな女の子達から聞いたけど、ここは別の世界だつて……なんで、シンはこんなところにホームを構えているの?」

……適當な」と言つたつてすぐに気づくだろうな…しようがない

「……これを聞くということは俺の秘密・人には到底理解できないことだが、それでもいいのか?」

俺が軽く睨むようにして言うと、一瞬体をビクツとしたけどいつもの無表情ではなく、真剣な顔になつた

「……うん。私は聞きたい。それがいけないものかもしれない危険なものなのかもしれない。それでも私はシンの…シンのことを知りたい」

◆?◆?◆?

《Aizaside》

「……うん。私は聞きたい。それがいけないものかもしない危険なものなのかもしない。それでも私はシンの…シンのことを知りたい」

これは紛れもなく私の本心、もしかしたらこれを聞くとシンとの関係が終わつて、二度と会えないかもしない。それでも私はシンのことを知りたかつた、私の心でシンのことを知りたいことと、二度とシンと会えないとかもしれないいうことの気持ちが争つていたけど、結局私は聞くことにした：もちろんシンと会えなくなるというのは嫌だ絶対にみんながシンと関わるなど言つても私はシンについて行くだろう。違うファミリア同士だけど、私にとつてシンはもうなくてはならない存在になつてゐる：この気持ちがなんなのか私にはわからない。ティオナ達に聞いたらティオナは面白そうにティオネは優しく笑つてレフイーヤは絶望したような顔になつた後、怒氣と殺氣が混ざつたように感情が高ぶつていた：ティオネが首をトンつてしたら気絶したけど

だから私は知りたい。たとえ二度と会えなくなることになつても私は絶対に離れないシンが駄目と言つても離れない。シンはもう私にとつてなくてはならない存在になつてゐる。だから…

「…わかつた、ならよく聞くといい…」

それからシンはポツリポツリと一つ一つ話していくた、自分も神であるということ主神力オスとオーディン、アメノミナカヌシの子であるということ、一度死んだこと、こ

の世界に来た経緯のこと、レティシア達のこと

どれもこれもが私にとつて何一つ信じられないような事で困惑したけど、それ以上にシンが私に包み隠さず話してくれたことが嬉しくて、私はシンに近寄つてシンの肩に頭を置いた…まるでティオネが言つてた恋人みたいだと思つたら胸も顔も熱くなつて：これが、『好き』って感情なのかな？そう思つたら胸が熱くじやなくて、ポカポカするような気持ちいいものに変わつた：顔が熱いのは変わらないけど、それで私は気になつてゐる事を聞かなくてはならない。私はシンの肩に置いていた頭を起こして、シンの顔を見ながら

「シンはこの事を話したら…私の前からいなくなつちゃうの？」

そう、私はこの事がずっと気になつていた、シンの口からこの事を話したらシンはいなくなるんじやないかつて

シンは私の顔をジツと見ながら

「……もしかしたらそうなるかもな」

そうシンが言つた時私の何かが切れて、私はシンに抱きついた

「……嫌だ」

最初は小さく

「…嫌だ」

だんだん大きくなつて

「嫌だ」

感情が抑えられなくなつて

「嫌だ！」

シンが私を驚いた顔で見てるけど、そんなことより私は！

「嫌だ！シンと離れたくない！まだ会つてそこまで時間は経つてないけど、私はシンがないないと嫌！シンとまた並んで歩きたい！一緒に戦いたい！シンと話したい！今みたいに何気なく時間が過ぎ去るのを一緒に座つて流れていくのを感じたい！だから……だからあ……私を置いてかないで……私をもう……1人にしないでえ……」

気づいたら私は目から涙を流していた、止めどなく流れて地面に落ちて土を濡らしていく、もう何も見えないくらい震んで、いくら目拭いでもどんどん出てくる。泣いたとのなんていつぶりだろうと思うことをせず、私はシンに置いてかれる事で頭がいっぱいで、そう思つていると私を包み込むように何かが私を抱きしめた

「ごめん。俺の不注意だ、アイズをそこまで追い詰めてたなんて……本当にごめん」

私は今も尚流れてくる涙を拭わずにシンの胸に顔を埋めた、シンの服が私の涙で濡れるけど、今はそんなことよりこの温かい気持ちをシンの体を感じてたい：そうか、これが：『好き』ってことなんだ。この温かい感情が好きつてことなのか、なら私はその感

情の通りに突き進むだけ、今までそうだったように今回は剣ではなく私の口でこの気持ちを

「…シン」

「なんだ……」

「私は…貴方のことが、シンの事が好き。ファミリアの人たちへの好きではなく、1人の女の子として…私は…アイズ・ヴァレンシュタインはシンの事が大好きです」

そう言つて私はシンの口に軽く口づけをした

「!!……俺を好きなのは何人もいる。そんな俺でも好きになつてくれるのか?」

「うん、それでも私はシンの事が好き」

私がそう言うとシンは少し頬を染めながらこつちを見た…おそらく私はそれ以上に赤いだろうけど

「わかった、それなら俺も只のシン、1人の男として言う……アイズ」

「…」

「私たちはお互いの顔を見ながら…

「俺も君のことが好きだ、会つて間もないけど、君の心に君の強くあろうとする姿に君の容姿が好きだ」

「…うん。……うん」

私はまた涙を流しながらシンに顔を近づけた、それと同時にシンも近づけて来た：そして…

『アイズ side out』

◆？◆？◆？

…うん、まあ、これで俺とアイズは恋人同士になつたわけですが、正直すつごい恥ずかしい。それ以上に嬉しいんだけどな。こんな可愛い子と恋人になれたんだから…まあ、絶対後でレティシア達から色々言われるんだろうなあ。ま、しようがない今は俺の膝で寝てる恋人が起きるまでのんびり空を眺めるとしますか…周りの幻獣達からの暖かい目が凄い、羞恥で死ねるとは正にこの事だな。でもまあ、俺たちのやり取りの間、静かにしててくれてありがとう。俺がそう言うと、『いえいえ、シン様の為ですから』と、目で語つてきた…ふう、顔が熱いなあ…でも、心地いい温かさだ

『おまけ』

ここはシンとカオス達が過ごした場所、現世と幻の狭間にある小さな世界『星の大海上のシン命名』でカオス達はいる。そこは辺り一面海でその上に立つようにして会話を行なつていた、因みにシンの修行場所でもある

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお…！」

!!!

「煩いカオス」

「これが落ち着いていられるか!! やつとシンに彼女が出来たんだぞ!! これで孫の顔を拝める日が近づいて来た…」

「さて、カオスは置いといて、本当にシンに恋人ができて良かつたねえ」「ああ、これで安心できる」

「そう言えばオーディン、あの吸血鬼だけどうまくいってる?」

「ああ、おそらくシンに見つかるのも今日か明日くらいだろうな」

「それは良かつた」

「よし、またシンの周りに女の子を追加しよう」

「…………は?」

「いや、だからな。女の子を追加しよう」

「いや、それは聞こえたよ。だけどなんていきなり?」

「そういう気分なんだ」

「カオスの気分で別の世界に行かされるとは…その女子を難儀やのぉ」

「そう言うなつて、それじやいつも通り決めていくか、種族は何にする?」

「「…ん?……人間で」」

「おけ」

そう言うと薄いパネルのようなものがカオスの前に出てきた

「それじゃ、スイッチオン！」

そう言つて、カオスがパネルの横にあつたボタンを押すと物凄いスピードでパネルの欄に写つていた名前をランダムで回り出した

「…………こだ！」

ボタンを押すとある一つの名前に止まつた、3神でパネルを覗き込むと

「…………やばくね？」

「やばい」

「まさか、生理的に無理なヒロインベスト3に入る女の子とはな……てか人間の部類でいいのか？」

「まあ、インターフェースと言つても限りなく人間に近いからいいんじゃないかな？」
「下手したら読者さんから叩かれるかもしけんなこの女子を出したら」

「メタイからやめろ（て）、オーデイン」

「そういうことならさつきカオスもメタイこと言つたではないか、何とかなヒロインと」

「…………」

「でも、どうする？」

「何がじや？」

「いや、あの世界にしかなかつたウイルス、シンが今いる世界はないじやん。しかもあの心を具現化する力のヴォイドゲノムもないしさあ」

「……色々弄つて儂たちがあの世界に適応するようにするしかないのぉ」「ウイルスは魔力に、ゲノムは……シンにこそつとつける？」

「そうするか……てか、魔力を抑えるつて……魔法使いからしたら天敵だな。魔法を使おうとしたら抑えられて本来の魔法にならないんだからな」

「ま、いいんじやない？それで、この子の世界にいた主人公とこの子に名前をつけた人とこの子の中に宿る女の子の事をどうするかなんだけど」

「まあ……消すしかないな。それか名前を与える前の前というか、別の目的で作られたようにするか……」の際ホムンクルスにでもするか？」

「それが一番楽な気がする」

「「……………」」

静かに波音を立てて、数秒後

「「ホムンクルスにするか」」

その後、色々カオス達がやつて いる最中シンは

「へつくしゅん…………だれか俺の事で話でもしてんのか？」

先祖返りと歌姫

アイズが寝て いるといつ のまにか昼時になつており アイズを起こして 食堂に行くと、みんながニヤニヤしてたり 嫉妬してたり 不機嫌になつていたりなど 様々だつた
「さて、シンとアイズのお付き合いに関して 乾杯!!」

「乾杯！」

おこりめぐらし

なんだ?

—何故知ってる?—

一見
てた

「どこから」

二屋上人

- 7 -

「……」顔真っ赤で俯く

「……えーと、すまん。アイズ、あの場所屋上から見えるってことすっかり忘れてた」

「……大丈夫、気にしてない。ただ……凄く恥ずかしい」／＼＼

「おやおやあ？ お二人さん顔が赤いですねえ？ ……もしかしてえ？ 人には言えないことを
しちゃつたのかなあ？」

「「かなあ？」」

うぜえ、物凄くカオスがうぜえ、そしてそれにのるガブリエルとフランとアルクは後
で拳骨だ

「「!？」」

クイ……クイ……

「ん？」

袖を引っ張られたので見てみると白が顔をうつむかせながら袖を握っていた

「どうした？ 白」

「……ねえ」

「ん？」

「私もいいよね？ それにシンにいの初めては私が奪つたし」

「……シン？」 ゴゴゴゴ

「待て！落ち着けアイズ！これはだな…その。罠だ！こいつは罠だ！カオスが俺を陥れるための張った罠だ！」

「……説明して」

「白、酒飲む、酔う、キス…おおおおお一けー？」ガクブル

「違う。酔つてない。白は白の意思でやつた」

「わかつた、わかつたから。落ち着け白、そして白を睨むなアイズ」

「「むう～」」

「やだ！これが修羅場というやつね！」

「「「カオスは黙れ（つてて）」「」」

「(、・ω・)」

「……私たちはふつうに食事をしようか」

「「「「そうね」「」」」

◆？◆？◆？

夜になつたので、3人を見送つたシンは突如湖の方面から気配を感じた

「……これは…吸血鬼？」

気になつたシンは湖の所に行くと

「……一体、何処から」

そして、また一瞬気配が出た

「…滝の裏か」

滝の裏に行くとそこには地下へと続く階段があつた

「……行くか」

…コツ…コツ…コツ…コツ

長く続く階段を降りるとそこには扉があつた

「……よし、行くぞ」

ギギギギ

扉を開けるとそこには

「ツ……」

四角い黒いキューブに下半身を埋めた金髪の美少女がいた

「…………（あ、お取り込み中か）…失礼しました」

「まつ、まつてゴホゴホ：私をここからだしゴホ…て」

「…（いや、無理だろこんなあからさまに封印されてますよ感が出てんのにつまりこの子

は危険な可能性があるわけで）」

「私！騙されてゴホ……こに閉じ込められて！」

「……」

「それに黒い渦にゴホツゴホツ飲み込まれて！気づいたらここに」

あんのクソ野郎どもく！」

俺の頭の中には2人の男が満面の笑顔でピースしてる顔が思い浮かんだ

「……わかった、助けよう」

「……ほんとう？」

「男に二言はない……体に触れるけどいいか？」

「……うん」

「……転移」

シンが魔法を唱えると少女のみがキューブから出されシンの胸の中にいた

「とと、大分筋力が衰えてるな。大丈夫か？」

「……え？……今のは？」

「転移の魔法使つただけだ……あ、そういうや服着てなかつたな」

「ツ……エツチ」／／

「どうしろと？ま、これ着とけ」

シンは自身が着ていたコートを少女に着せた

「うん……大きい」

「そりや俺のサイズに合わせてるからな。さていつまでもこんな所にいるのも悪いだろ
うし地上まで出るぞ…って筋力が衰えてるから歩けないな。なら転移で行くか」

「わかつた」

「“転移”」

シンが転移した場所は湖のすぐ近くだつた

「……綺麗」

少女は夜の湖の幻想的な光景に目を奪われていた
「さて、外の景色も見れたし城までいこう k…」



突如、歌声が響いてきた

「……歌？」

「お前にも聞こえるか、こっちだな」

シンは歌声が聞こえるところまで少女をおぶつて向かつた

そこには妖精たちが歌を聴いて和んでいた、そして星の光で照らされた所には1人の白い服を着た少女がいた

*白い服と聞いてわからない人はいのりの着ていた戦闘服と考えてください結構です

♪♪♪♪♪♪…

歌が終わりシンガ

「君は……」

「ツ……」

少女が振り向くと桃色の髪に赤い瞳をこちらに向けてきた

「ああ、驚かせてすまない。別に君を襲おうつてわけじゃない。ただこの時間帯に君が何故ここにいるのか気になつてね」

「……わからない」

「わからない？ どういうことだ？」

「気づいたらここにいて、それ以前の記憶がなくて、でも知識はあつて……気づいたら歌つていた」

「そうか、名前も…忘れたのか？」

「…」コク

「なら君とか、だと失礼だからな俺が思い浮かんだ名前でいいか？嫌なら別にいいんだが」

「…わかつた、貴方が決めて」

「そうか、なら君は“いのり”だ」

「いのり？」

「ああ、君の歌はまるで祈りのように見えた、それで人を癒したり鼓舞したり様々だ。だからいのりだ」

「いのり…いのり…うん。私はいのり」

「そうか、それは良かつた」

「ねえ、私も名前欲しい」

「ん？なんでだ？お前には名前があるだろう？」

「あるけど、もういいその名前は捨てたからだから貴方が付けて」

「お、おう……うーーーん……あ、月、いや何か足りんな。ムーン……あ、ユエ」

「ユエ？」

「ああ、別名で月つて意味もあるんだ」

「ユエ、ユエ。うん気に入った」

「それは良かつた、あ、そういうえば俺が名乗つてなかつたな。俺はシンだ、よろしくな。
ユエ、いのり」

「うん、よろしく」

星の光が3人を照らした